

KA GU MI
加久見城館遺跡群

— 試掘確認調査報告書 —



土佐清水市教育委員会

平成 22 年 3 月

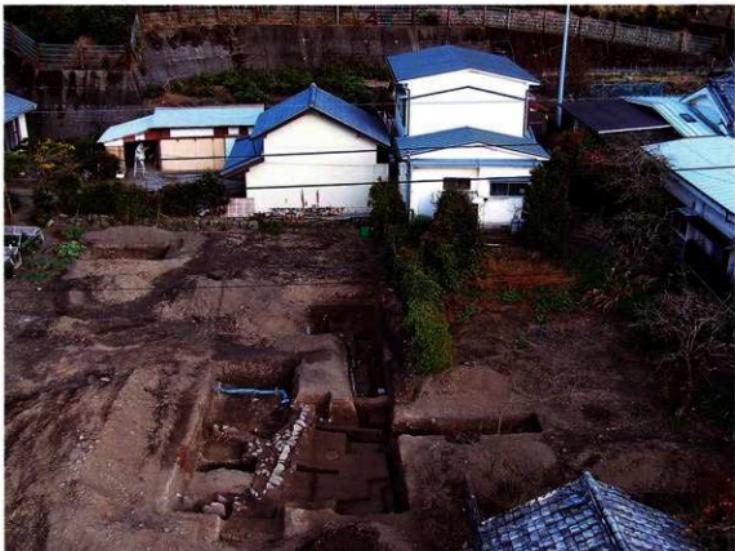
土佐清水市埋蔵文化財調査報告 1

KA GU MI
加久見城館遺跡群

— 試掘確認調査報告書 —

土佐清水市教育委員会

平成 22 年 3 月



宮本地区調査区全景（西より）



列石基礎遺構1検出状況（東より）

巻頭図版 2



タロノ川地区（平成20年度）3・4区

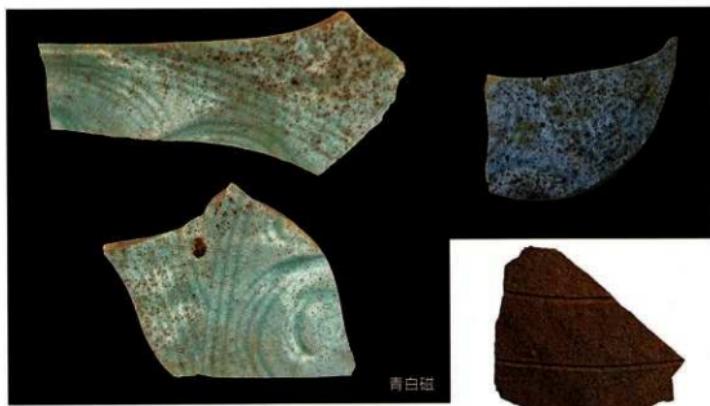
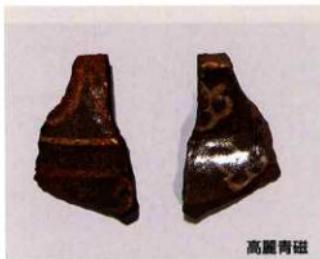


泉慶院調査区石塔・石仏検出状況



泉慶院調査区トレンチ 5 完掘状況

卷頭図版 4



各地区出土遺物

序

本市加久見地区の香仏寺にある中世以南の豪族加久見氏関連五輪塔群は、昭和47年に土佐清水市の史跡として文化財に指定されております。土佐清水市教育委員会では、これら加久見氏関連遺跡群を高知大学教育学部日本史研究室と共に、高知県教育委員会の指導をいただきながら試掘確認調査を実施しました。

本書は、平成19年度～21年度までの3年間国庫補助事業を導入し実施した、加久見氏関連遺跡群の試掘確認調査の成果概要をまとめたものです。調査は狭い調査範囲でありますましたが、15世紀代の加久見氏屋敷跡関連の集石造構や柱穴及び上坑等又出土遺物では、大量の土師質土器や瓦質土器、瓦器碗、貿易陶磁器である青磁や白磁なども出土しています。

本書に掲載いたしました成果が、地域文化の保護や理解のための資料として、また郷土の魅力を引き出す糸口として、わずかでも貢献できれば幸いです。

この試掘確認調査は、土地の所有者や近隣にお住まいの方々の深いご理解とご協力によって支えられたものであります。また、調査の実施にあたりましては高知県教育委員会、高知県埋蔵文化財センター、高知大学教育学部日本史研究室をはじめとする関係機関より、格別のご指導とご配慮をいただきました。皆様方のお力添えに深く感謝しますとともに、今後とも土佐清水市文化財行政にご理解とご支援をいただきますようお願い申し上げます。

平成22年3月

土佐清水市教育委員会

教育長 村上 康雄

例　　言

- 1 本書は、高知県上佐清水市加久見において平成19・20年度に実施した、「加久見氏城館遺跡群」の範囲確認のための試掘確認調査報告書である。
- 2 加久見氏関連の遺跡としては、加久見上城跡、加久見下城跡が周知の埋蔵文化財包蔵地として知られているが、本調査においては、加久見氏居館跡や家臣団屋敷の特定などを目的とした。
- 3 試掘確認調査及び報告書刊行作業は、上佐清水市教育委員会が、高知県教育委員会、財団法人高知県文化財出土埋蔵文化財センター（以下、高知県埋蔵文化財センター）の協力を得て実施した。
- 4 調査の担当は、芝岡忠三（上佐清水市教育委員会）のほか池澤俊幸、弘田和司（高知県教育委員会文化財課）があたった。調査に際しては、上佐一条氏やその外戚となった加久見氏の研究を進めてこられた、市村孝男教授（高知大学教育学部）の指導と協力を得た。また、次の方々には発掘調査及び整理作業の実施にあたり協力を得た。記して感謝の意を表す次第である。
- 5 古成承：（高知県埋蔵文化財センター）、宮地啓介（香南市教育委員会）、岡本治代（高知大学院生）、青木保則、上田桂子、扇喜祥裕、松浦寛、村上博通、山下晃弘、吉田由紀子
- 6 本書の執筆は芝岡忠三（上佐清水市教育委員会）のほか池澤俊幸（高知県埋蔵文化財センター）、松田直則、弘田和司、田村公利（高知県教育委員会文化財課）が分担し、編集は弘田和司、田村公利が担当した。
- 7 本書に関する出土遺物、図面、写真類は上佐清水市教育委員会において保管している。

目 次

序

土佐清水市教育長

例言

第1章 調査に至る経緯・経過	1
第1節 調査に至る経緯	(芝岡) 1
第2節 調査経過	(池澤・弘田) 2
第2章 遺跡の地理的環境と歴史的環境	(田村) 5
第1節 遺跡の地理的環境	5
第2節 遺跡の歴史的環境	7
第3章 調査の概要	12
第1節 宮本地区の調査	(池澤・松田) 12
第2節 香仏寺地区の調査	(池澤) 24
第3節 ラロノ川地区の調査	(弘田) 25
第4節 姉田地区の調査	(弘田) 30
第5節 泉慶院地区の調査	(弘田) 34
第4章 まとめ	42
第1節 中世・加久見地域の景観復元とその考察	(田村) 42
第2節 南方貿易における水軍基地としての加久見	(田村) 51
第3節 出土遺物から見た加久見氏の地域支配	(池澤・松田) 56
第4節 泉慶院五輪塔調査補遺	(弘田) 59

報告書抄録

図・表目次

第1章 調査に至る経緯・経過	
第1図 調査地点図 (1:5,000)	4
第2章 遺跡の地理的環境と歴史的環境	
第1図 上佐清水市位置図	5
第2図 「諸国經節番付表」	6
第3図 九条家・一条家略系図	10
第3章 調査の概要	
第1節 宮本地区の調査	
第1図 宮本地区調査位置図 (1:600)	12
第2図 TR 3 造構配置図 (1:80)	13
第3図 KTR1・2 平断面図 (1:60)	14
第4図 列石基礎造構1平・断面図 (S = 1:40, 1:20)	15
第5図 炉跡1・SX 1 平面図 (1:20)	16
第6図 TR 3 平・断面図 (1:50)	17
第7図 TR 4 平・断面図 (1:50)	18
第8図 TR 5・7 平面図 (1:50)	19
第9図 出土遺物実測図① (1:3) (19・22・23・24は1:4)	22
第10図 出土遺物実測図② (1:3) (54のみ1:2)	23
第2節 香仏寺地区的調査	
第1図 香仏寺地区 TR 1 土層模式図	24
第3節 フロノ川地区的調査	
第1図 フロノ川調査区位置図 (1:2,000)	25
第2図 調査区配置図 (1:80)	26
第3図 トレンチ1平・断面図 (1:40)	27
第4図 土坑1平・断面図 (1:30)	27
第5図 トレンチ2平・断面図 (1:40)	27
第6図 トレンチ3平・断面図 (1:40)	28
第7図 柱穴断面図 (1:30)	28
第8図 遺物実測図 (1:3・1:2)	29
第4節 鮎田地区的調査	
第1図 鮎田地区調査区位置図 (1:3,000)	30
第2図 トレンチ1・2 土層柱状図 (1:40)	31
第3図 トレンチ4 土層断面図 (1:40)	31
第4図 トレンチ3平・断面図 (1:40)	32

第5図 土坑1平・断面図(1:30).....	32
第6図 柱穴断面図(1:20).....	32
第7図 遊物実測図(1:3).....	33
第5節 泉慶院地区的調査	
第1図 泉慶院調査区石造物・地形測量図(1:80).....	35
第2図 石塔・石仏平・立面図(1:60).....	36
第3図 トレンチ5平・断面図(1:60).....	37
第4図 トレンチ1・3・6・7断面図(1:40)・トレンチ3出土遺物図(1:3).....	37
第5図 五輪塔実測図①(1:10).....	38
第6図 五輪塔実測図②(1:10).....	39
第7図 五輪塔実測図③(1:10).....	40
第8図 五輪塔基壇実測図(1:10).....	40
第9図 石仏実測図(1:8).....	41
第4章 まとめ	
第1節 中世・加久見地域の景観復元とその考察	
第1図 明治期の加久見とその周辺の地形	43
第2図 1948年米軍撮影の航空写真(国土地理院所収)	49
第3図 中世加久見地域歴史的景観復元図	50
第4節 泉慶院五輪塔調査捕獲	
第1図 三崎香寺寺 4類の一石五輪塔	59
第2図 一石五輪塔分類(1:10)	60
第3図 石塔類蓮華文様の変遷	63
第4図 宝鏡寺跡宝筐印塔の蓮華文様	64
第1表 泉慶院石塔類一覧	66

写 真 目 次

第1章 調査に至る経緯・経過	第4章 まとめ
第2節 調査経過	第1節 中世・加久見地域の景観復元とその考察
写真1 レーザー測量作業風景	写真1 加久見地区的航空写真
写真2 平成20年度現地説明会風景	写真2 上船田地区的トレンチ
第3章 調査の概要	写真3 国道321号直線道路
第3節 ヲロノ川地区的調査	写真4 微高地にある祠
写真1 調査前状況①	写真5 砂間から上茶ヶ佐古方向
写真2 調査前状況②	写真6 満江山北麓(東側から)
写真3 調査前状況③	写真7 国道沿いにある微高地
	写真8 微高地にある五輪残欠

- | | |
|--------------------------------|-----------------------|
| 写真9 香仏寺石塔群 | 写真21 北から見た瀬江山 |
| 写真10 津森湖の撤高地 | 写真22 矢熊付近の鷹取山 |
| 写真11 小字汐入付近 | 写真23 大岐・念西寺にある五輪塔 |
| 写真12 宝山北麓にある墓石左面の接写 | 写真24 旧念西寺境内にある五輪の残欠 |
| 写真13 宝山北麓の墓石 | 第4節 泉慶院五輪塔調査補遺 |
| 第2節 南方貿易における水軍基地としての加久見 | 写真1 三崎香仏寺4類の一石五輪塔 |
| 写真14 加久見氏居館の推定地 | 写真2 加久見香仏寺の花崗岩一石五輪塔 |
| 写真15 ヲロノ川の発掘現場 | 写真3 宝山北丘陵の一石五輪塔 |
| 写真16 泉慶院の五輪塔群 | 写真4 一石五輪塔・基壇復元 |
| 写真17 加久見川とセンケ | 写真5 基壇分類 |
| 写真18 宇中野丸付近の遠景 | 写真6 基壇71出土状況 |
| 写真19 加久見東側に続く山並 | 写真7 三崎香仏寺の石仏 |
| 写真20 宝山の遠景 | 写真8 泉慶院石仏B類の編年 |
| | 写真9 海藏院の一石五輪塔の1c頃文様 |

図 版 目 次

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------------------------------|
| 卷頭図版1 宮本地区調査区全景（西より） | 列石基礎遺構1 遺物出土状況
(T R 3-W。古瀬戸他。北東より) |
| 卷頭図版2 ヲロノ川地区（平成20年度）3・4区 | 図版5 瓦器碗(8)出土状況
KTR1下層遺構（西より） |
| 泉慶院調査区石塔・石仏検出状況 | 柱穴遺物出土状況 |
| 卷頭図版3 泉慶院調査区トレンチ5完掘状況 | 図版6 炉跡1断面
KTR1下層終了状況（東より） |
| 卷頭図版4 各地区出土遺物 | P 1 下層遺物出土状況 |
| 図版1 加久見全景 | 図版7 T R 5 (西より)
T R 5 土層断面（北より） |
| 宮本地区近景 | T R 7 S D 2 (西より) |
| 香仏寺地区近景 | 図版8 T R 6 (北東より)
T R 5 P 3 梅瓶出土状況
調査終了状況（西より） |
| 図版2 泉慶院地区遠景 | 香仏寺調査区 |
| 蛭田地区近景 | 図版9 トレンチ配置状況（西より）
トレンチ1
トレンチ2 |
| ヲロノ川地区遠景 | ヲロノ川調査区 |
| 宮本調査区 | 図版10 調査前風景① |
| 図版3 T R 3 完掘状況（西より） | |
| 列石基礎遺構1 検出状況（北より） | |
| 列石基礎遺構1 | |
| 図版4 T R 3 南壁とKTR1 (北東より) | |
| 列石基礎遺構1 北側遺物出土状況
(備前・天日) | |

	調査前風景②	作業風景
	トレンチ 1	石造物検出状況①
	トレンチ 1 土坑検出状況	石造物検出状況②
	トレンチ 1 土坑	石造物検出状況③
	トレンチ 2	石造物検出状況④
図版11	トレンチ 2 柱穴	図版15 トレンチ 1
	トレンチ 3	トレンチ 2
	トレンチ 3・4	トレンチ 7
	トレンチ 4 造構検出状況	トレンチ 3 上層断面
	トレンチ 3 柱穴	トレンチ 6
	青磁出土状況	トレンチ 3
蛙田調査区		
図版12	トレンチ 2	図版16 陶磁器（青磁・白磁・唐津）
	トレンチ 4	備前焼・東播系・龜山系・常滑焼
	調査区近景（トレンチ 3）	瀬戸・美濃産陶器、天目碗
	調査区近景（トレンチ 4）	瓦器・瓦質土器
	トレンチ 4 土層断面	瓦質土器・土師質土器・銅錢
	トレンチ 3	出土遺物
図版13	トレンチ 3 土坑断面	図版22 出土遺物
	トレンチ 3 土坑	図版23 五輪塔①
	トレンチ 3 柱穴検出状況	図版24 五輪塔②
	トレンチ 3 柱穴遺物出土状況	図版25 五輪塔③
	トレンチ 3 柱穴断面	図版26 石仏①
	トレンチ 3 土層断面	図版27 石仏②
泉慶院調査区		
図版14	調査前状況	

第1章 調査に至る経緯・経過

第1節 調査に至る経緯

今回の「加久見氏城館遺跡群」の試掘確認調査は、平成17年度～平成19年度にかけて、市村高男教授（高知大学教育学部日本史研究室）を代表として行われた、「海運・流通から見た土佐一条氏の学際的研究」に端を発しており、市村教授の指導と県教育委員会の協力を得て、土佐清水市教育委員会が中心となり平成19年度～平成21年度国庫補助金を受けて実施したものである。

市村教授は、これまでにも土佐一条氏の研究を精力的に行ってこられ、中世土佐において一条氏の果たした役割を明らかにしてこられた。その中で土佐一条氏は、幡多下向後も京都と強く結びついていたこと、九州・四国の諸勢力とも婚姻関係を結びつつ、より広い交易活動を行っていた可能性を指摘されている。そうした研究をより発展させた「海運・流通から見た土佐一条氏の学際的研究」において、土佐清水市加久見に注目されたのである。

加久見の地は、土佐一条氏の外戚（初代教房の後室）となった加久見氏の本貫地であったが、加久見氏関連遺跡としては、2つの城跡及び香仏寺に所在する五輪塔群（土佐清水市指定文化財：史跡指定昭和47年7月30日）が知られていたものの、加久見氏やその家臣の屋敷については周知されていなかった。そこで、市村教授は長宗我部地検帳の研究から加久見氏や家臣団屋敷の位置を推定し、県教育委員会文化財課や財団法人高知県文化財団埋蔵文化財センター職員の協力を得て、発掘調査を実施した。

研究成果の一部として、城跡の網張り調査では、15世紀後半頃の城普請の形跡が確認された。香仏寺（所在）の五輪塔群は、14～16世紀代のものを中心とする四国でも有数の存在であり、加久見氏の勢力の有り様をうかがうことができた。また、文献調査では、地検帳の記載から加久見の集落の中心部に加久見氏の屋敷跡が存在することも明らかとなった。

さらに、平成17年度には、加久見氏の屋敷跡や家臣団屋敷、菩提寺の一つと見られる寺院跡の存在を確認するため加久見地区の数地点においてトレンチ調査を実施した結果、屋敷跡と推定できる地点を絞り込むに至った。

翌平成18年度、土佐清水市教育委員会はそれまでの調査成果を受け、市村教授との共同調査を実施し、初めて調査主体となって加久見氏屋敷跡推定地の試掘確認調査を行った。

この試掘確認調査は、加久見氏屋敷跡推定地にトレンチ4箇所を設定し、遺構・遺物の有無を確認した。その後も市村教授の土佐一条氏研究の一環として、土佐清水市教育委員会の試掘確認調査のトレンチを拡張し、遺構の把握を行なった。

これまでの調査成果は現地説明会や成果報告会、概要報告書で広く公表され、住民も地域の歴史に興味・关心を寄せるようになりつつある。そこで、土佐清水市教育委員会としてもこの機会によりいっそう市民が地域への愛着をもち、新しい街づくりの一助となるべく発掘調査の実施に取り組むこととなった。

第2節 調査経過

高知県教育委員会では、土佐清水市加久見を本拠とし土佐一条氏の外戚となった加久見氏の居館と関連遺跡の範囲確認調査にあたり、土佐清水市教育委員会より職員派遣依頼を受けて、高知県教育委員会文化財課職員の池澤俊幸（平成19年度当時）と弘田和司（平成20年度）を土佐清水市に派遣し、調査支援を行った。

調査は、高知大学教育学部市村孝男教授の指導と田村公利（平成19・20年当時足摺岬中学校教諭）の協力を得て、加久見氏居館位置の特定ほか、家臣団屋敷推定地、菩提寺の1つと考えられる泉慶院石塔群の内容確認を目的に行った。

引きついで平成21年度には、高知県教育委員会文化財課弘田和司、田村公利が図面及び出土品整理作業並びに報告書編集を行った。

1 調査体制

平成19年度		平成20年度	
教育長	井上 章	教育長	井上 章
生涯学習課長	橋本 清郎	生涯学習課長	倉本 和典
課長補佐	芝岡 恵三	課長補佐	芝岡 恵三
係 長	坂本 孝仁	係 長	坂本 孝仁
調査指導	池澤 俊幸 (県教育委員会文化財課)	調査指導	弘田 和司 (県教育委員会文化財課)
平成21年度			
教育長	村上 康雄		
生涯学習課長	倉本 和典		
課長補佐	芝岡 恵三		
係 長	坂本 孝仁		
調査指導	弘田 和司、田村 公利 (県教育委員会文化財課)		

2 調査日誌抄

(1) 平成19年度

- 11月12日(月) 調査開始。調査前撮影、調査区設定。
11月13日(火) TR3-W 区で列石基礎遺構1を探索開始。KTR1東南隅調査開始。
11月16日(金) TR3-W は中世後期の包含層掘削。遺物出土状況撮影。香仏寺区着手。堂前のTR1で土坑跡撮影。無遺物。
11月17日(土) 列石基礎遺構1付近精査。香仏寺区 TR2調査。一定締りのある層に到達。
11月19日(月) TR5設定、掘削開始。上位より、中世遺物多数。
11月20日(火) TR5掘削。TR6乍着手。

- 11月24日(土) TR5遺構とKTR1のピット完了。午後測図。
- 11月27日(火) TR7設定。現区画の前身とみられる蝶列検出、近世遺物伴う。
- 11月28日(水) 雨天のため作業停止。TR5.6セクション調査と遺物洗浄。
- 11月29日(木) KTR1-WでⅢ層上面とみられる面。TR7ではサブトレでⅣ層とみられる橙色層確認。
- 12月3日(月) KTR1-WはⅡ下層掘削中。遺物は中世に近世以降が若干混じる。TR7溝跡検出。
- 12月4日(火) KTR1下層遺構撮影。PM記者発表準備。
- 12月5日(水) 14時記者発表。作業はKTR1-W等。Ⅱ層は、中世遺物多く、近代?遺物若干。
- 12月6日(木) KTR1-W 近世以降落込みでサブトレを各所に設定し、全容確認。
- 12月7日(金) 作業後、高所作業車にて撮影。18時より市立図書館にて成果報告会。
- 12月8日(土) 10~12時現地説明会。参加100名弱。午後遺物洗浄等。
- 12月11日(火) 平板測量。埋め戻し準備・遺物取上げ・遺構土囊保護開始。梅瓶出土ピット撮影。
- 12月12日(水) 遺構を保護し、撮影。埋め戻し。調査終了。

(2) 平成20年度

- 4月25日(金) 現地視察、打ち合わせ。
- 8月7日(木) 調査地打ち合わせ、調査地確定。
- 8月18日(月) 泉慶院地区草刈り。
- 8月19日(火) 蛙田地区重機によるT1・2掘削。
- 8月20日(水) ヲロノ川地区重機による表土掘削。
- 8月21日(木) 泉慶院地区レーザー測量(委託先:株式会社四航コンサルタント)。
- 8月22日(金) 蛙田地区掘り下げ、土坑、ピット検出。
- 8月26日(火) 蛙田地区調査終了。泉慶院地区調査開始。
- 9月2日(火) ヲロノ川地区調査開始。
- 9月8日(月) 泉慶院地区終了。
- 9月11日(木) 記者発表。
- 9月12日(金) 現地説明会準備。
- 9月13日(土) 現地説明会。参加者80名。
- 9月16日(火) 埋め戻し作業。調査完了。



写真1 レーザー測量作業風景



写真2 平成20年度現地説明会風景



第1図 調査地点図 (1 : 5,000)

第2章 遺跡の地理的環境と歴史的環境

第1節 遺跡の地理的環境

(1) 土佐清水市の位置と風土及び歴史的変遷

加久見遺跡群の所在する土佐清水市は、高知県の最南端に位置し、北緯32度46分、東経132度57分、北は四万十市と幡多郡三原村、西は宿毛市・幡多郡大月町に隣接する。面積266.77km²、東西約25km、南北約24km、人口は16,771人（2010年1月末現在）の規模を有する市であり、亜熱帯気候に属し、年間降水量は約2,500mm、年平均気温は約18℃で全国的に温暖な気候である（土佐清水市、1996）。

土佐清水市は、海とともに歩んできた。そう表現しても過言ではない。海の豊かな恵みと暖かい気候に育まれながら、他地域との交流や交易を通して成長してきた。豊後水道を介して九州と近く、土佐国東部や中央部にはない独自の文化や歴史が形成されてきた。高速道路や大型リゾート施設は市域内になく、足摺宇和海国立公園に市域がすっぽりと入る豊かな自然の中で市民は生活している。

市域が歴史に登場するのは、承平年間（931～938年）に編纂された『倭名類聚抄』に幡多五郷の一つ「鯨野（いさの）郷」として記された頃からである（竹内、1986）。現在の足摺岬地区一帯を伊佐（いさ）と呼び、足摺岬を中心とする市域全域と大月町の一部を含めてこのように呼ばれていたと推測される（中山、1980）。

中世は、「土佐国幡多莊 本庄 大方庄 山田庄 以南村 加納久礼別符」が一条家荘園となった（『九条道家惣処分状』）。このときの地域名が、以南村である。ここには年貢収納の役所たる預所が置かれ、二郎右衛門と呼ばれる人物が取り仕切っていた（『金剛福寺文書』）。長宗我部地検帳によると以南村は市域全域と大月町月灘地区を併せた一帯を指し（中山、1980）、一条家荘園の中でも山田村等と並ぶ規模の大きい村であった（市村、2008）。



第1図 土佐清水市位置図

近世には、紀州印南の海民が旅漁に来て、伊佐（足摺岬）、松尾、大浜、中浜、清水、越、養老の鼻前七浦（足摺岬の突出した地形が鼻と呼ばれていたため）据浦を築いた。彼らは傷みやすい鰯を節加工して上方や江戸等に廻船を出して出荷した。この鰯節加工は土佐国の地場産業として発展した。中でも鼻前七浦で加工される鰯節は品質・量ともに土佐国で群を抜いていた。文政五年（1822）『諸国鰯節番付表』によると、最高位の

第2節 遺跡の歴史的環境

(1) 中世・土佐国幡多荘と京都との位置関係

衛星写真もなく、測量図もなかった中世の方位觀は現在とは異なる。北は佐渡や能登、東は津軽半島の陸奥湾側に開けた外が浜、西は薩南諸島に位置する鹿喜界ヶ島、南は土佐・紀伊である。当時日本の最南端と認識されていた土佐國足摺岬や室戸岬、紀伊國那智あるいは熊野等は補陀洛渡海の聖地であった（市村、2007）。土佐國最南端である足摺岬を含む幡多荘は中世において特別の場所と捉えられていた。特に海路を中心にして、東南アジアや中国華南地方等の南方との貿易を行うには位置的に好都合の場所であったと考えられている。陸路中心の交通形態である今日はどちらかというと僻地としてマイナスマレーシーで捉えられているのと比べ対照的である。足摺岬に所在する金剛福寺がなぜ中世日本国の中南端の特別な寺院として位置付けられていたか。その意味を考えれば当時の足摺岬を含めた以南地域及びそれを包括する土佐國幡多荘の存在意義が見えてくる。

高知県は東西に長く西と東では言葉が異なる。西部の幡多郡では、大方荘（現在の黒潮町大方）以西が「幡多弁」を使用する。佐賀村（現在の黒潮町佐賀）は「土佐弁」である。ここが両方言の境である。「土佐弁」の語彙が京阪方言の影響が強いのに対して「幡多弁」は比較的標準語に近くアクセントが東京と似ている。また、幡多弁は語尾に「けん」と付ける。豊後水道・瀬戸内海を挟み、大分県・広島県・岡山県でも語尾に「けん」と付ける。これは一側面から捉えるならば、かつて交易等を通じて人と人との交流がなされていたことを暗示しているのではないかと思われる。

近代以降、鉄道や高速道路等の陸上交通が整備され、海路中心から陸路が主な交通手段となり、幡多郡は京阪神方面から遠く僻地というイメージや「陸の孤島」的な存在となった。しかしながら、近世以前は海路が中心であり、海流や風等の関係により瀬戸内海航路が発達していった。ゆえに土佐國中央部よりもしろ距離的に遠い幡多郡の方が京阪神に近い関係にあったのではないかと思う。

紀伊水道を通り土佐沖を南下するコースは、蒸気船導入前の帆船では風や海流任せであり、黒潮本流に逆らっては航行が困難であったと推測できる。ただし、沿岸を航行して土佐湾流を利用すれば、紀伊水道を通り室戸を回って土佐國中央部に行くことも可能であった。1468年、一条教房が中村に下向したのがこの航路である（中村まで海路であったかは不明）。土佐・室戸沖や紀州・潮岬沖は実際に潮の流れが速く大型動力船に乗っていてもうねりが激しい。したがって、近畿方面から土佐國へ航行する場合、帆船においては、豊後水道を通る瀬戸内航路が比較的安全なルートであったと思われる。

室町期の貿易ルートを探るには、日明貿易のルートがヒントとなる。15世紀半ば頃まで瀬戸内海航路は門間海峡を通るコースが基本航路として利用されていた。応仁の乱以降は航路も変化し多様化した。大内氏によって門間海峡がおさえられていたためである。これ以降、豊後水道を通り九州南端を通るコースが利用された。豊後水道を通るコースの中継地として幡多郡の浦々が利用された可能性が高い。

弘治年間（1555–57年）に日本の状況について、中国人の目を通して観察した『日本一鑑』が記された。その航路に薩摩・豊後・土佐幡多を経て土佐湾沿いから阿波・泉州に至る航路が紹介されている。瀬戸内海や門間海峡航路が海上の幹線とすれば、これらは支線というべきであろう。このような支線が当時はいくつもあったと思われる（市村、2001）。

今回の土佐清水市の発掘調査は、広くは東アジア及び東南アジアを射程に置きつつ、加久見や清水

が直接貿易はないにしても間接的に（薩摩や琉球を介しての）その結節地であり、貿易港として機能していたことを証明していくための証拠を得ることがその目的である。

（2）一条教房の土佐国幡多荘下向とその目的

これまで前関白まで勤めた一条教房の土佐国幡多荘下向は、応仁の乱で焼け野原となった京の都の戦火を逃れて落ち延びてきたというのが定説であった。あるいは、『土佐清水市史上卷』においては地元豪族に押領された失地回復のためとされている。

このようなどちらかといふとマイナスイメージで幡多下向を捉える説に対して、高知大学教育学部日本史研究室（代表・市村高男教授）は、一条教房と嫡子政房が土佐国幡多荘と揖津国福原荘へのほぼ同時期の下向（教房は1468年9月に土佐へ、政房は同年11月に揖津へ下向）は、中国や東南アジアとの交易とその利益に着目しての行動ではないかと推測している。

土佐国の足摺岬や室戸岬は、紀州熊野方面と並び中世は日本国の中南端として位置づけられ、袖陀洛信仰の聖地として熱烈な信仰の場とされた。いわば東南アジアなどの南方に最も近い場所として認知されていたのである。また、土佐清水市域の爪白や下ノ加江、足摺半島にはややピンク色を帯びたカリ長石を大量に含んだ兵庫県六甲地域で産出されたと推定される花崗岩の五輪塔が多く分布する。中でも加久見氏の菩提寺である加久見香仏寺は群を抜いて集積している。これらの花崗岩は兵庫県六甲産である説が有力ではあるが、他地域にも類似した花崗岩があり、六甲山と確定するまでには至っていないが、政房が兵庫津を押さえていた事実からその関連性は興味深い。

豊後水道や瀬戸内海の要衝として位置づけられる大分市は、1996年から大友館跡発掘調査がなされてきた。その中で、14世紀後半から15世紀前半に焼かれたと推定される東南アジアや中国華南製の貿易陶磁が出土した。焼締陶器や施釉陶器、龍泉窯系青磁、青白磁梅瓶、五彩荷物、青釉陶磁器等がそれである（『大友館跡－発掘調査概報II－』2001年大分市教育委員会）。であるならば、豊後水道対岸である土佐国幡多荘にもこのような交易の視線が延伸されていたとしても不思議ではあるまい。事実、2007年の発掘調査では、加久見館跡と見られる地点で大友館において発掘されたと同種の青白磁梅瓶が出土しているのである。

市村（2001）は、一条房家が大船を建造していること（『天文日記』、1527年）。土佐一条氏が本願寺や朝廷に綾子、豹皮、唐犬など外国の産物を贈答していること（『お湯殿の上の日記』）。これらの状況証拠を挙げながら、一条氏と南方貿易との可能性が大きいとしている。

海賊のイメージの強い倭寇は、前期と後後に分類され、その時期や構成員が異なる。前期倭寇は14世紀から15世紀にかけての南北朝や室町期にかけて活躍し、五島列島、壱岐、対馬を本拠として日本人が多くいた。一方、後期倭寇は、16世紀の戦国期に活躍して中国浙江省や福建省の蜜貿易商を中心で日本人は10~20%程度であった。東南アジアに進出していたポルトガル人も加わっていた程であった。種子島に鉄砲が伝來した史実は小中学校の社会科歴史的分野の教科書や高校日本史の教科書に重要な史実として常に記載されている内容であるが、このときに種子島に漂着したのは後期倭寇として活躍した中国人・王直（五峯）の所有するジャンク船であった（葉山、1992）。この船にポルトガル人が乗組して種子島に漂着したと言うのが史実である。王直（五峯）についてここでは深入りすることは避けるが、彼は大内義隆や大友宗麟とも交易関係があり、西国の諸大名とも通じていた。このように当時中国の海禁政策の強化の中で、倭寇や密貿易者たちが黄海、東シナ海、東南アジアなどを舞台

として流通の網の目を張り巡らしていた。

このような東アジアや東南アジアの情勢の中で、一条氏やその系列である土佐一条氏が中国華南や東南アジアと交易をしていたとしてもなんら不思議はないのである。

(3) 土佐一条氏と加久見宗孝との血縁

応仁元年（1467）、戰禍の拡大に伴い一条教房は、父兼良、母、嫡子政房らとともに実弟尊尊を頼り奈良大乗院に隠居する。その後、嫡子・政房は撰津へ、教房本人は土佐国へ下向する。政房はその後、山名・赤松軍に殺された。

教房は堺から土佐国のある有力豪族・大平氏の船で阿波国沿岸や土佐国東岸の沿海を通り、土佐湾流を利用して湾岸を西に進んでいる（『大乗院寺社雜事記』）。井ノ尻まで海路で移動したことは分かっているが、その後の移動が陸路か海路かは不明である。

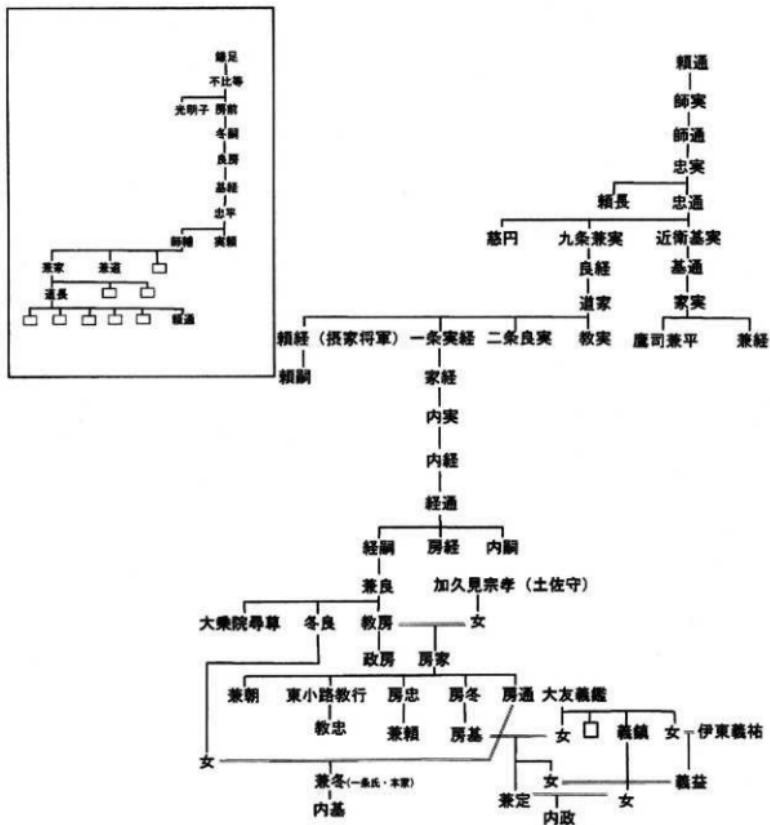
中村に居館を構え、幡多莊の有力豪族に官途受領を朝廷に奏上している。入野家則（現在の黒潮町入野領主）を「市正」に、加久見宗孝（現在の土佐清水市三崎から大浜までを支配した領主）を「土佐守」に等々六人の推挙を行った。前門白という地位をフルに活用して在地豪族を巧みに自身の実質的支配下へと組み込んでいる。

また、莊園内の豪族の領地替えも行っていた可能性がある。京都から従ってきた一条氏の家来である兼松氏や町氏の城及び上居が、平田村や宿毛村に所在したり、布村を支配していた布氏の城が平田村に所在したことがそれである（市村、2001）。

莊園内でも要衝である清水湊や越湊を押さえ、以南村の主要部分（三崎から大浜まで）を勢力下に治めていたのは、加久見宗孝であった。教房の正妻・二条局の死去後、この宗孝娘を後妻とする。宗孝娘は、教房に付き従い下向してきた貴族・町顯郷の養女となり、身分や格式を整えた上で教房に嫁いで「中納言局」と呼ばれた。その後、1476年に房家が誕生、1480年10月に教房は死去する。房家は、仏門に入るべく母中納言局とともに金剛福寺に入ったり、母方の祖父・宗孝の庇護の下、清水で生活している（『大乗院寺社雜事記』）。教房没後の幡多莊の豪族・家臣間の対立坑争に巻き込まれることを避けて中村の居館を後にしたものとみられる（市村、2001）。

このような状況下で、在国豪族である為松・河原・宮氣氏が、京都から下向した一条氏家臣である難波（備前守）氏を襲撃して殺害する事件が発生している。これらの詳細な理由は定かではないが、教房という柱をなくして不安定な情勢の中、以前から燃っていた在地豪族と下向組の一条氏家臣間との勢力争いが表面化したものであろう（市村、2001）。

1494年、房家は在地豪族の後押しのもと元服して中村の居館に戻り、土佐一条家を創設して幡多莊を支配する。以降、土佐一条氏は、中村渡川合戦において長宗我部元親に滅ぼされるまでの約80年間、仁淀川以西の土佐国を支配する戦国大名として国内外で破格の待遇を受けている。その間、伊予・宇都宮氏、豊後・大友氏、日向・伊東氏、長門・大内氏などの戦国大名と豊後水道や瀬戸内海を介して血縁関係を結び、交流をもった。土佐一条氏の歴史的評価は決して高いとはいえない。これまでその全容が謎のままで研究自体も進展してこなかった故である。どちらかというと、後の時代に活躍した長宗我部元親やその後土佐に入った山内一豊が、戦国大名として注目されがちである。しかし、土佐一条氏は血筋や官位からも、活躍の舞台の広さからもこれらの後の戦国大名をはるかに凌駕するといつても過言ではないであろう。



第3図 九条家・一条家略系図

1516年、房家（当時40歳）は、次男房道をともない上洛している。房道が養子となり、京都本家の一条氏を継ぐためである。この間、10ヶ月京都に滞在して様々な儀式や祝宴に参加している（『後法成寺尚道公記』『宣胤卿記』『為和卿記』）。また、長男房冬も伏見宮家から妻を迎えている（『二水記』）。このように土佐一条氏を聞いた房家は、父から受け継いだ幅広い人脈によって、京都や奈良の公家や寺社と頻繁な交流を続け、破格の待遇を受け続けたのである（市村、2001）。房家の墓は現在の宿毛市平田町の藤林寺に所在するが、当時の繁栄の名残はなくひっそりと墓石が座っているだけである。

10~11世紀にかけて、中央貴族の末裔が、文武にわたる実務能力を見込まれて、諸国に迎えられて、国府の幹部クラスの要人として辯腕を振るう。その上で、現地豪族の娘婿になり、現地に上着して武

士団のリーダーとなる社会現象が起こった。このことは、石井進氏によって示唆され、大石直正氏によって指摘されている（入間田、2002）。奥州の平泉藤原氏が、貴族の末裔でありながら、現地の豪族の血統にも属していたことがその例である。土佐一条氏の例は、時代的に異なることはいうまでもないが、これらの先例とは実質的に異なる。中央貴族の超一流たる一条氏、しかもその嫡流である一条教房自身が自ら下向して士団として、在地豪族の有力者加久見氏と血縁関係をもって直接支配しているのである。そこには一条氏を動かす何らかの利点があったはずである。

（引用・参考文献）

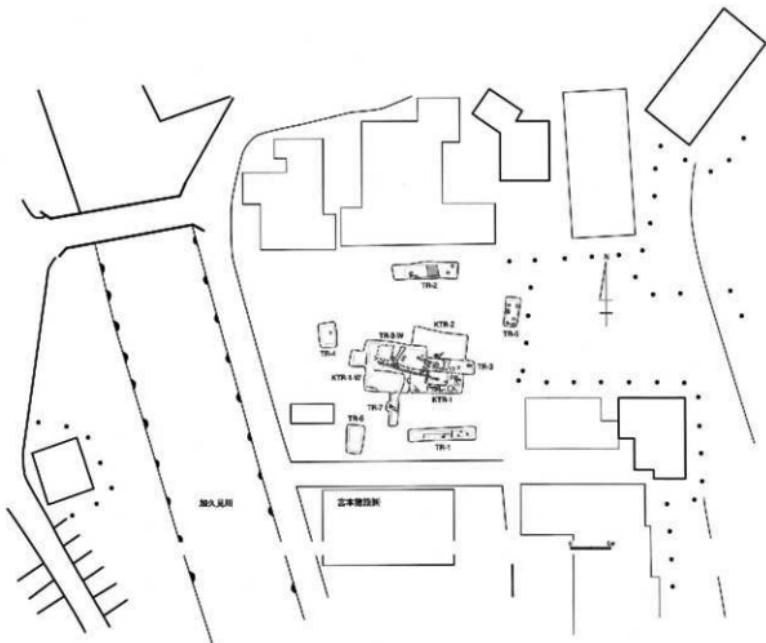
- 市村高男（2001）：公家大名一条氏の成立。南海路の発展と経済成長。『県史38 高知県の歴史』山川出版社、122-146。
- 市村高男（2007）：中世日本の中の蹉跎山金剛福寺－土佐一条氏との関連を中心にして－。西南四国歴史文化論叢よど、8、1-18。
- 市村高男（2008）：海運・流通から見た土佐一条氏と加久見氏。『海運・流通から見た土佐一条氏の学際的研究 2005～2007年度科学研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書』高知大学日本史研究室、5-34。
- 入間田宣夫（2002）：第1部北の平泉。『日本の中世5 北の平泉、南の琉球』中央公論新社、16-162。
- 竹内理三編（1986）：39高知県。『角川日本地名大辞典』角川書店、1100-1104。
- 土佐清水市（1996）：土佐清水市の概要。『第五次土佐清水市総合計画（総合版）』土佐清水市企画広報室編、5-9。
- 中山 進（1980）：近世以南の概要。四 近世。『土佐清水市史上巻』土佐清水市、753-980。
- 葉山楨作（1992）：鉄砲伝来とその波紋。『日本の近世 第4巻 生産の技術』中央公論社、35-106。

第3章 調査の概要

第1節 宮本地区の調査

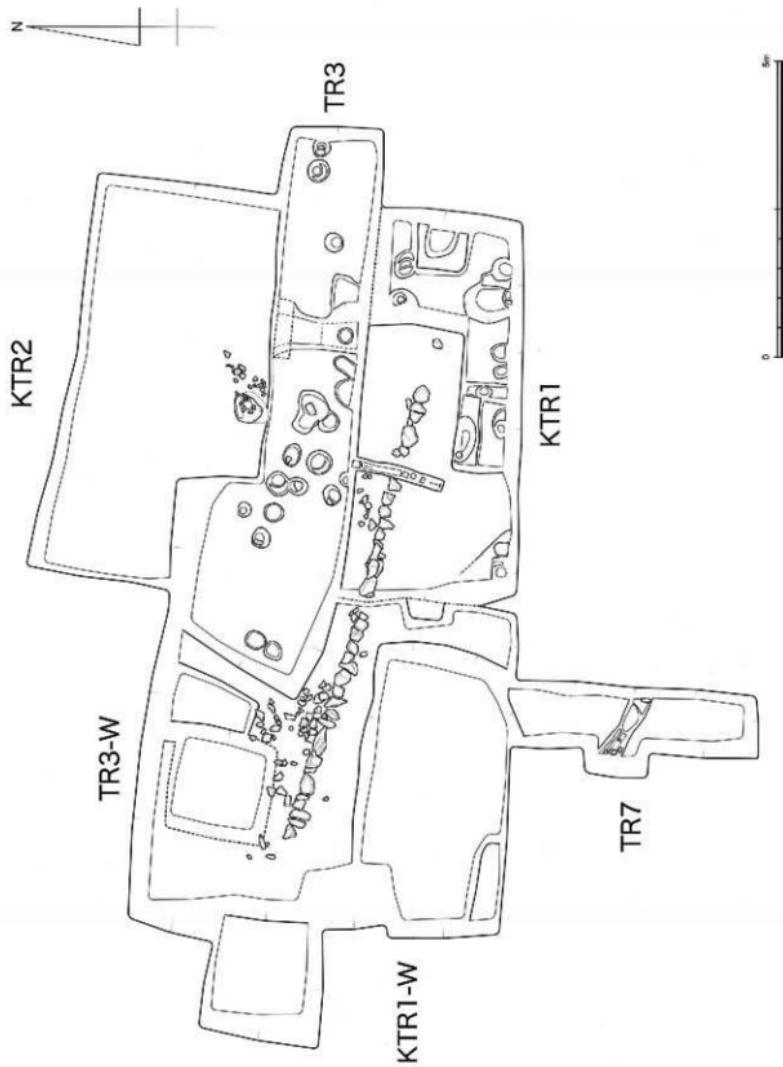
1. 調査の目的と方法

2006年度に科学的研究費（市村高男（高知大学教授））と共同で行った調査は、科研区がKTR1, 2、当市の調査がTR 1～4である。2007年度は、前年度に検出した遺構・遺物の性格や広がりを把握するため、遺構・遺物の密度が高かったTR 3、KTR の拡張および下層調査を中心に、TR 5やTR 6も新たに設定した。掘削は表土のみ重機を使用して除去し、包含層以下は人力で行った。試掘確認調査であるため、遺構を破壊しないように心がけ、目的を達した場合は必ずしも遺構埋土を完全掘削しなかった。当地点では概ね2面の中世遺構面が存在するが、上面に遺構がある場合はその保存を優



第1図 宮本地区調査地位置図 (1:600)

先した。KTR1の列石基礎遺構周辺とKTR2では上位遺構面以下の掘削を行っていない。調査終了後は土嚢やシートで遺構を保護し、埋め戻した。

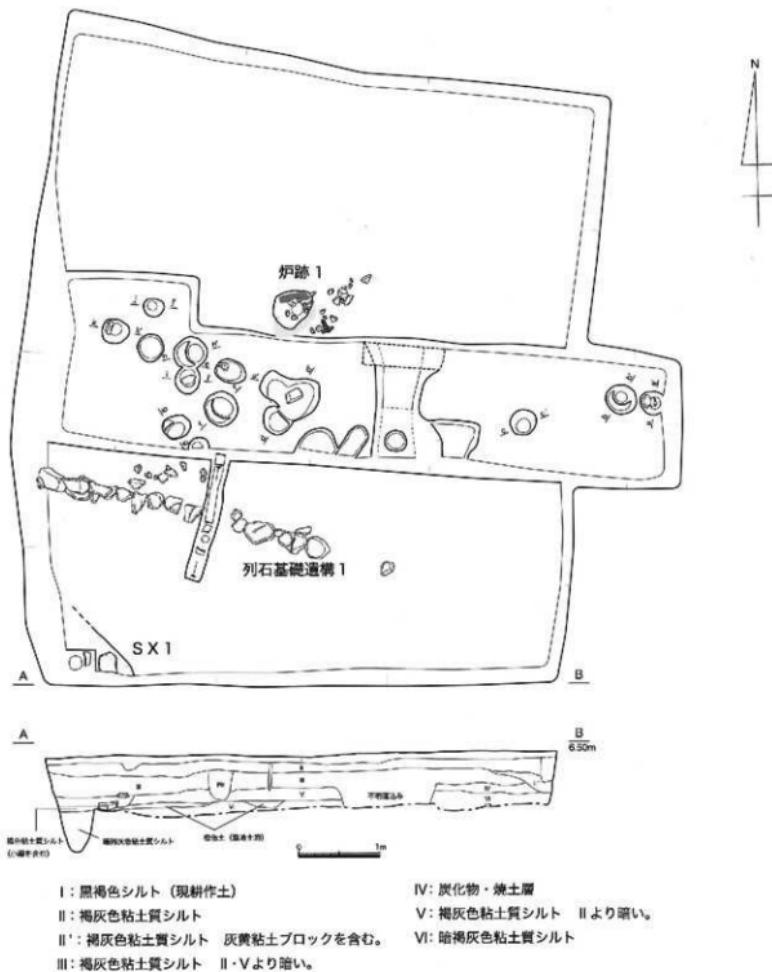


第2図 TR 3 遺構配置図 (1 : 80)

2. 調査の成果

TR 1

対象区の南部に設定した東西方向のトレンチである。包含層の土質や遺物はTR 3と共通的で、両区間に比較的安定した堆積が広がっているものとみられる。堆積状況から、概して元来は西部（川



第3図 KTR 1・2 平断面図 (1:60)

側)が低かった様子がうかがえ、V層上位からⅢ層にかけて比較的純粹かつ水平な橙色土の薄層やレンズ状薄層が複数観察できる。

検出した3基のピットは、いずれもVI層上面から掘り込んでおり、直径約26~36cm、深さ30cmで、底に礫の入ったものがあった。その他、壁面で近世とみられるピットも観察される。前者のピット群に近接して、土師質土器片の集中があった。その他出土遺物に瓦器楕6、東播系須恵器捏鉢14、瓦質土器48がある。

TR 2

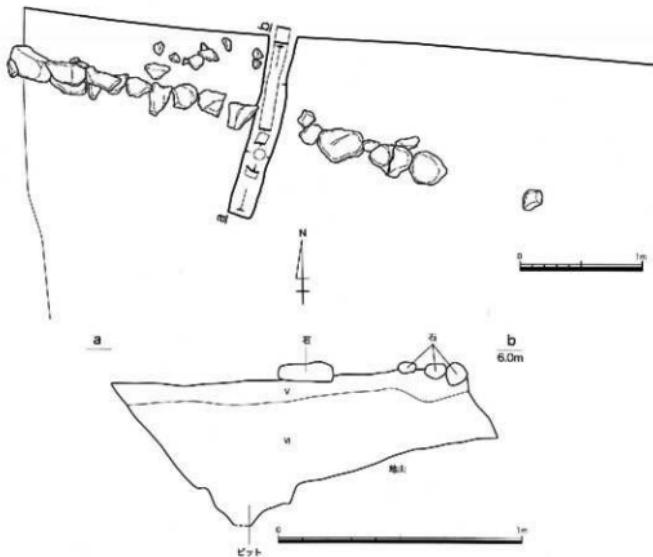
対象区北部に設定した東西方向のトレンチで、径35~42cmのピット4基を検出した。堆積上層や出土遺物の時期はほぼTR 3に準ずるが、同TRに比べて遺物密度が包含層、遺構埋土とともに低く、炭化物なども少ない。ピットの埋土や遺物はTR 3と同様であることから、所属時期も大差ないものと考えられる。

TR 3

(1) 概要

2006年度の調査で遺構・遺物が最も充実していることから、翌年度も調査の中心とした調査区である。列石基礎遺構1の西延伸部分の確認と、掘立柱建物跡の広がりを見るため、KTR1, TR3の西側に、各々KTR1-W, TR3-Wを設定した。また、KTR1東南部の上層遺構がない部分で、下層の確認を行った。

第2図は両年度の成果を合成したものである。列石基礎遺構1からその北側にかけて、残存良好な



※層位はTR3南壁セクションに相当。

第4図 列石基礎遺構1平・断面図 ($S=1:40, 1:20$)

中世遺物が多く出土した（巻頭図版1・図版4）。KTR1-W南西部の大部分を占める長方形の落込みからは、瓦や少量の近世陶磁器が出土している。TR3-W西寄りの正方形の竪穴は近現代に属する。

(2) 基本層序

当区の包含層は大きく3分でき、II層が近世、III、IV層が中世後期、V層が中世前期を各々堆積時期の上限とする。VI層は存在しない場所がある。VI層はKTR1や南側の市教委TR1では観察できたが、KTR2やKTR1東端部では観察できなかった。IV層は最大厚10cmと薄いが、橙色あるいは焼土からなり、しばしば炭化物の薄層を伴う特徴的な層で、IIIとV層の間に位置する。所々で途切れため、第3図では東端にしか現れていない。IIIとV層は、出土遺物からは時期差を指摘できない。III層は調査区東部や南部では上下2層に分けられ、後記の列石基礎遺構1は下層上面に設置されている。

地山上に薄く堆積するV層は、若干の炭化物と土師質土器細片を含み締まりがある。当層の上面が中世前期の遺構表面とみられ、地表面下約90cm前後で、後記のピット群等が検出された。

全体として、各包含層の厚さは20cm以下の部分が多いにもかかわらず、比較的平準かつ安定的で砂礫等は目立たない。また、層厚数cm程度の焼土・炭集め層や橙色単純上層（IV層）は、各生活面での活動状況を示唆しており、堆積の経緯に関しても有効な手がかりとなる。調査前地表面からの深さは、III層上面が20~30cm、IV層が東端で60cmを測る。

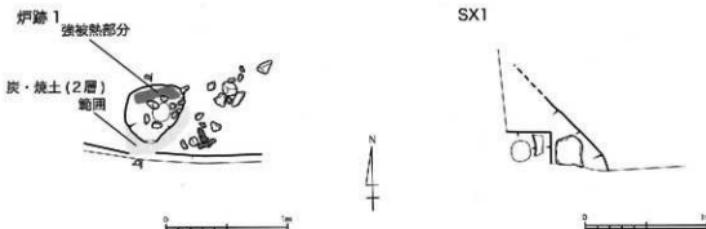
なお、KTR2及び市教委TR3の東部のIII~V層において炭化物や焼土粒、被熱礫が多い傾向があり、後記の炉跡1も検出した。銅製品や鋼鐵も当該部で出土しているが、関連性は不明である。

(3) 検出遺構

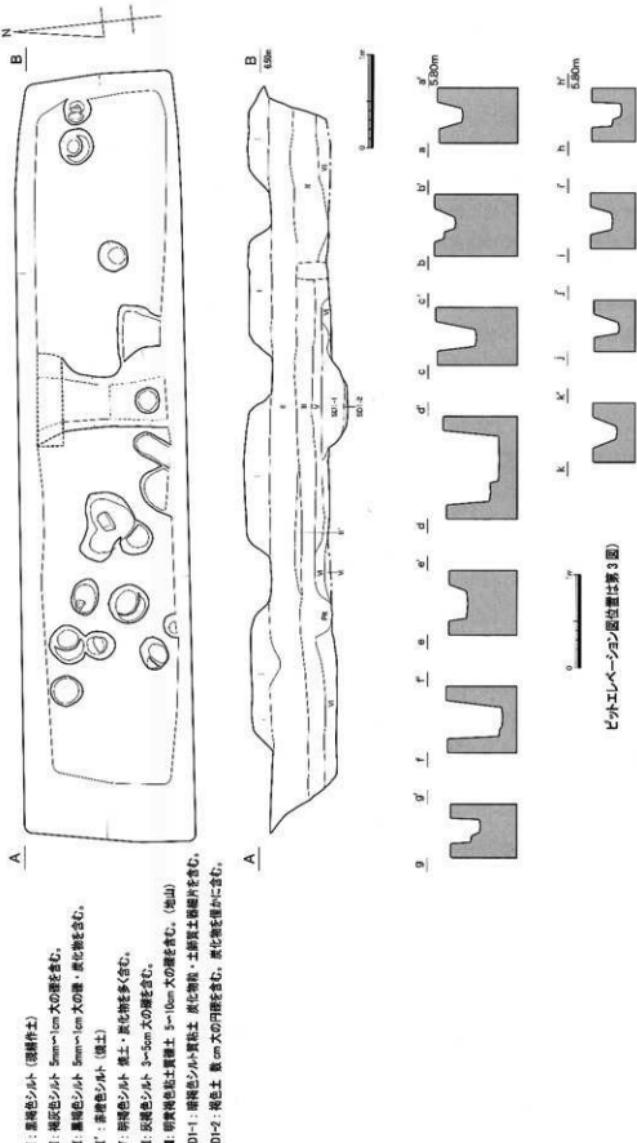
i. 列石基礎遺構1

KTR1で検出し、KTR1-W区で延長を確認した結果、8.8mとなった。東端部は乱されているとみられ、本来はさらに延びていた可能性がある。石材長は20数~30数cmで、部分的に2段分が残る。10~10数cmのものは介石として用いたようである。石は北側に面をなすよう並べられ、打削面を北側に向けたものもある。一定間隔で礫石とみられる石があることから、建物の基礎遺構とみられる。石材は当地前面の加久見川付近で採取可能な砂岩や泥岩の自然石であるが、打削されたものや被熱によるとみられる変色をしたものがある。

当遺構はIV層より上位にあり、III層が上下に2分できる場所ではIII層下層上面に設置されているとみられた。断面でも掘形等はみられない（第4図）。本遺構直近の出土遺物は、北側に散布している



第5図 炉跡1・SX1平面図 (1:20)



第6図 TR 3平・断面図 (1:50)

遺物群と同時期で（図版4下）、15世紀代に位置付けられる。

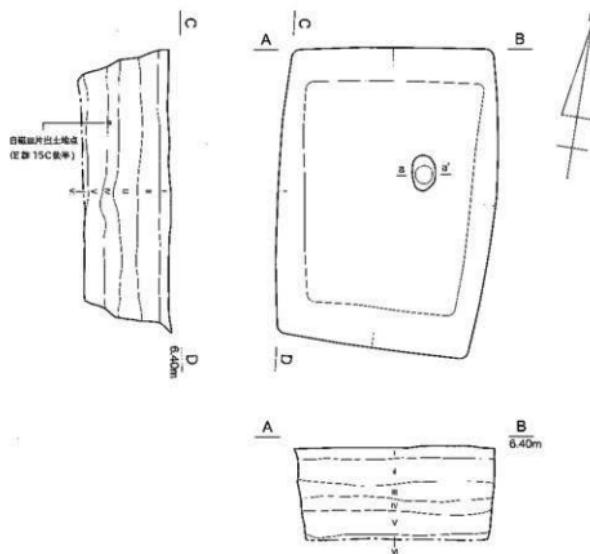
本遺構が建物の遺構であった場合、KTR1南西隅で確認した礫石状遺構S X 1やT R 7の溝状遺構との関連も考えられる。

ii. ピット群

下面で検出した柱穴群は径30~40cm、深さ30~60数cmを測る。P 1からは、青磁碗片29及びほぼ完形の土師質土器小皿1が出土した。P 2からは瓦器碗片7が出土。その他のピットからも瓦器碗や土師質土器片が出土している他、埋土上位に盤状の石や、打削・被熱のある石が入っている柱穴があつた。これらピット群の多くは注穴跡で、時期は出土遺物から13世紀代を主体にするとみられる。

iii. SD 1

トレンチ中央部で検出した溝跡で幅90cm余、深さ20cm余を測る。埋土に流水の痕跡はなく、埋土上から掘り込むやや小さめのピットがあった。土層との関係からみて、中世前期の柱穴群に若干先行して埋没が始まったと考えられる。



- I : 明黄褐色シルト (表土)
- II : 褐灰色シルト 5mm~1cm 大の砾を含む。灰色が強い。(旧耕作土)
- III : 次褐色シルト (遺物包含層)
- IV : 明黄褐色粘土質シルト (遺物包含層)
- V : 黒褐色シルト 1~3cm 大の砾を含む。(遺物包含層)
- VI : 明黄褐色粘土質シルト 5~10cm 大の砾を含む。(地山)



第7図 TR 4 平・断面図 (1:50)

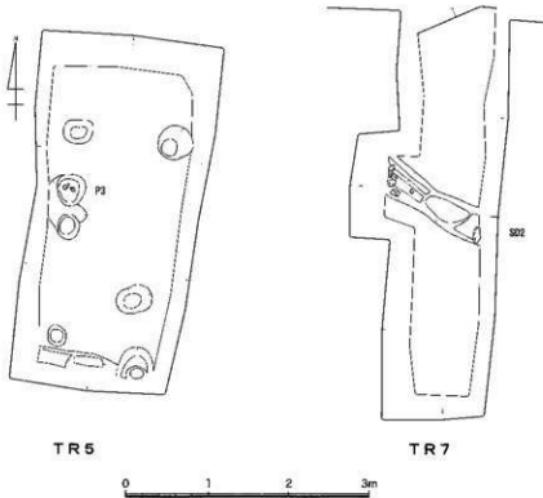
iv. その他の遺構

隣接する科学的研究費（市村）調査区の状況は、今回の調査成果を理解する上で必要なため、概要を記す。

1) SX1 KTR1南西隅で検出した遺構で、V層を約15cm掘り込んで礎盤状の石が据えられている（第3、5図）。時期的に先行するピットが西側に接する。列石基礎遺構1と礎盤状の石の中軸間距離は2.05mを測る。土層等との関係より、15世紀代に属すと考えられる。

2) 炉跡1 KTR2の南辺で検出した。検出時は炭、焼土、細砂の混じる部分が長軸62cmの楕円形で現れ、その周縁は幅約2.5cmの帯状に紫赤色を呈した。槽内中央のやや内寄りに長軸14cmの紫赤色の部分もある。東側に散在する礎の中には、激しく被熱したものがある。焼けた土が周縁部で立上がる部分も断面で観察された。覆土である1層及び3層を除去すると、長軸52cm、中央部の深さ5cmの不整円形の緩やかな落込みとなった。底面にある礎は全て被熱しているが、基盤層自体が礎を多含するので礎の性格ははっきりしない。床面は、基盤層が深さ約2.5cmまで赤紫色に変色しており、特に被熱の著しい部分もある。第3層で充填される中央の小さな落込みの性格は不明である。

本遺構では時期比定できる遺物が出土していない。基本層序との関係は、V層を掘り込んでIV層に達していることは確認できたが、III層から掘り込まれていた可能性を否定できない。既述の通り、当区の遺構群は大きく中世前期と同後期に分けられるが、炉跡1は、上記の状況から後期に属すると考えられる。本遺構に関して、基本層序IV層で焼土や炭、被熱・分裂した石が目立ち、III層やV層から鉄滓がいくつか出土していることが意識される。また、本遺構の東隣より「元豊通宝」（図版20）や銅製品54が出土しているが、関連性は不明である。



第8図 TR 5・7平面図 (1:50)

TR 4

西部に設定した小トレンチで、ピット1基を検出したが、それから出土した遺物はない。当トレンチの遺物密度は、TR 3と比較して低い。

TR 5

対象区域の山側に設定したトレンチで、面積は5.8m²を測る。検出された柱穴群は径30~40cm、深さ30~60cmで、TR 3のそれらと同様である。P 3の埋土上位より出土した青白磁梅瓶44~46は外面に比熱痕があり、同一個体であったとみられる。包含層からは常滑窯片20の他、土師質土器や瓦器片が出土した。

TR 6

川側に向かって落込む堆積状況がみられ、落ち際には20数cm前後の石が検出された（図版8上）。明確な遺構は検出されなかった。面積は6.7m²を測る。出土遺物に白磁40がある。

TR 7

KTR1-Wから南に延ばしたトレンチで、列石基礎遺構1に関連する遺構の探索を意図した。SD 2は幅70cm、深さ18~20数cmで、10数cm大の石を含む。検出標高は列石基礎遺構1と大差ない。

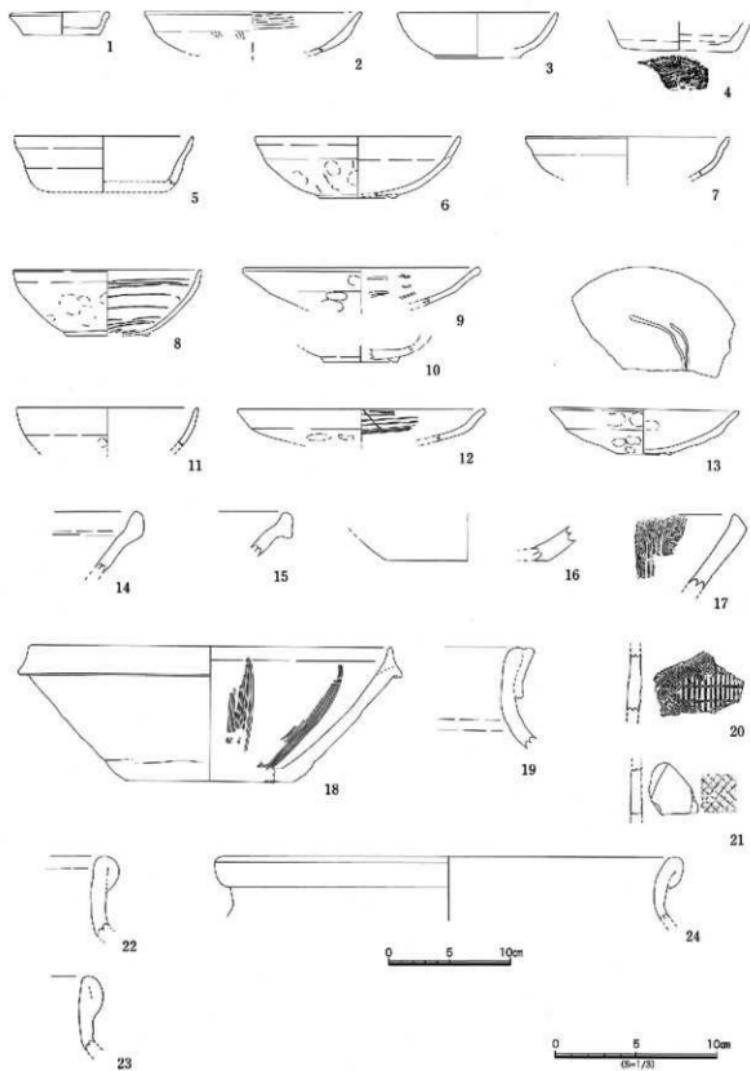
3. 遺構及び土層堆積状況について

列石基礎遺構1は建物の基礎に関わる遺構である可能性が高く、「礎石建物」との関係が留意される。当該期は守院や都城以外での礎石建物の初現期と目されるが、詳しい様相は解明されていない。本県における礎石建物は岡豊城跡で16世紀中頃に出現しているが、今次の列石基礎遺構1は時期的にそれを大きく超えており、当該期における南四国の建物構造を考える上で注目すべき資料である。

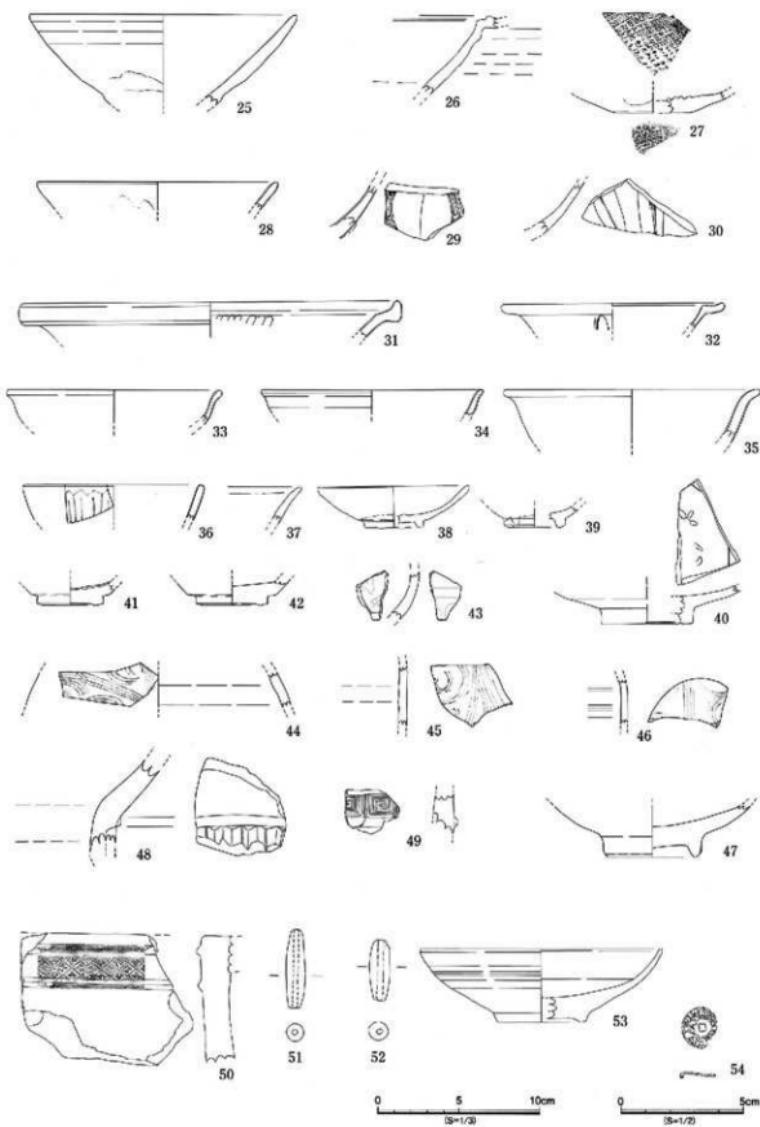
下位の遺構面で検出したピット群は、主に掘立柱建物の柱穴とみられ、該期の柱穴としてはしっかりした規模を持っている。調査面積が限られているため建物の全容は不明だが、配置状況からみて連結等が想定される。また、柱穴群が集中する位置と列石基礎遺構1がほぼ重なり、包含層の遺物密度も高いことから、13世紀代の屋敷地が何らかの形で15世紀まで継承されている可能性がある。

当地点の堆積土層を概観すると、砂礫をあまり含まず比較的薄く安定的に堆積した2~4層の遺物包含層や、既述した焼土・炭集め層、均質な櫻色土層の状態から、人為的な整地が想定される。出土遺物等からみて大きくなれば13世紀後葉と15世紀代の生活面があり、15世紀内でも2度以上の整地を想定できる。IV層を中心にIII層やV層でも焼土や炭化物の集中部が認められ、炉跡や鉄滓も検出していることから、小鍛冶等も行われたとみられる。

当地区の旧地盤や堆積層は、概して西の川側へ緩傾斜しており、TR 3西部やTR 4といった当敷地の西部では中世の遺構・遺物が急減する。土層断面では、中世後期以降の層は川側に向かって徐々に厚くなる傾向があり、山裾と河川に挟まれた狭隘な立地条件の中で、徐々にではあるが敷地が安定していく様子がうかがえる。なお、「ラロノ川」地区の各所に小トレンチを設定した科研費（市村）調査では、上層から砂礫の堆積がみられた地点が多く、土砂の影響を受け易かったとみられる。また、現在の加久見川は、地元では近世に開削されたと伝えられており、昭和30年代頃までは以前の川筋が西側の山裾に残り、「古川」と呼ばれていたという。前地区長の談によると、昭和30年代に現在の川筋で上手の嵩上げ工事を行い、同40年代や平成初期に護岸工事を実施した。護岸工事の際に香仏寺前で五輪塔が出土し、現在境内に立ち並ぶ石造物の中にはその際のものが含まれているといふ。



第9図 出土遺物実測図① (1:3) (19・22・23・24は1:4)



第10図 出土遺物実測図② (1:3) (54のみ1:2)

存器高1.3cmを測る。40はTR6のⅦ層出土で底部破片であるが、高台径5.6cmを測る白磁碗で、内面見込みに印刻で文様が施され外面は露胎である。

41・42は天目茶碗である。底部破片で明確ではないが、胎土から中國産の貿易陶磁と考えられる。43は高麗青磁の胴部の細破片で象嵌が施され貫入が入る。44～46は、青白磁の梅瓶の胴部破片で外面明綠灰色、内面灰色を呈する。TR5のP1から出土しており同一個体と考えられる。47も青白磁の碗で、高台疊付は露胎で高台内に削り工具痕が観察できる。

48～50は瓦質土器類である。48は風炉で49・50は火鉢類である。48は表面の瓦質化が良好である。49は細片であるが浅鉢と考えられ、外面に雷文が施される。50は浅鉢で口縁部外面に四方櫛文に類似するスタンプ文が施される。その他、図示し得なかった遺物には土佐型鍋と呼ばれる瓦質土器片も存在する。

51と52は土錘で、51は全長4.9cm、幅1.1cm、重量5gを測る。52は一部欠損しており残存長3.7cm、幅1.2cm、重量4.2gを測る。53はKTR1-WのⅡ層出土の唐津の碗で、口径14.9cm、器高4.5cmを測り、口縁部は内湾気味に上方に立ち上がり見込みには砂目跡が残る。54は金属製品で銅製の飾り金具で、全長2.5cm、幅2.2cm、厚さ2mmを測る。その他、炉跡1の東隣でV層から「元豐通宝」が出土しているが遺物の状態を考慮し図化していない(図版20)。

第2節 香仏寺地区の調査

2ヶ所のトレンチを設定した。現仏堂前のTR1は2.6×1.5mで、第1図のごとく炭化物や焼土の目立つ層があった。Ⅲ層上面から掘り込まれた土坑があり、その壁面は焼け、底には炭層があったが(図版9)、当遺構および各土層とも有効な出土遺物に欠け、時期は不明である。

出入口のTR2では、細緻を含む繰りのない土層の堆積が厚く、その下の地表下1.7m前後にある基盤的な面は、川側に傾斜している。その最下面で、中世末～近世とみられる小径の土師質土器小皿2点が出土した。当トレンチでは、他の遺物は出土しなかった。

以上から、谷地形の当地で、中世末～近世初頭頃以降堆積が進んだ状況が看取される。既述した地区長老の五輪塔出土談も含めて、当地の景観形成過程の資料となる。

I.	整地土。層厚27cm。
II.	褐色。炭化物含。層厚16cm。
III.	IIより明るい褐色。 炭化物含。層厚24cm。
IV.	褐色。炭化物含。層厚14cm。
V.	黃褐色。10cm大までの 風化礫。繰りなし。下限未 確認。

* II以下は基本的に地山風化礫及び風化土。

第1図 香仏寺地区 TR1 土層模式図

第3節 ヲロノ川地区の調査

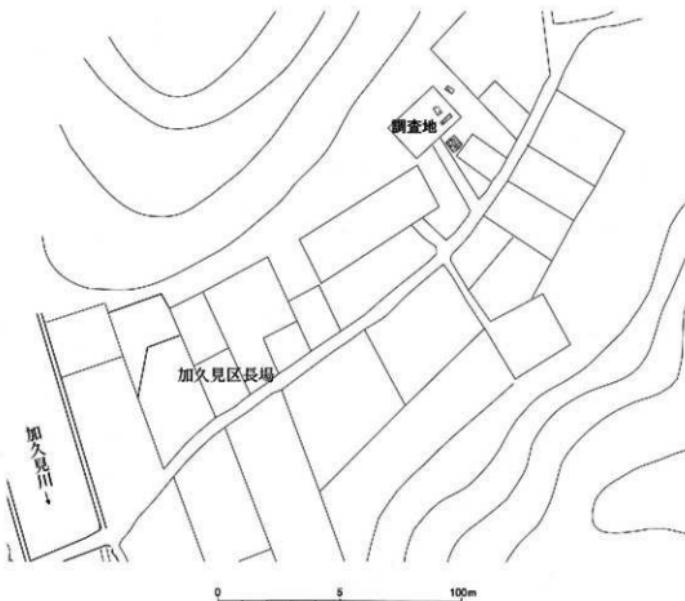
調査地は、加久見川の支流であるヲロノ川の小谷沿いにあり、谷の出口両側の丘陵上には加久見上城跡、下城跡が所在する。また、加久見氏居館の一部が確認された宮本地区からは東へ約150m程、谷奥へ入った地点にあたる。

この谷は幅100m、奥行き250mの緩斜面で、その中央を流れているヲロノ川自体は現在、蓋をされて谷の中央部を走る道路となっており、その両側の山裾には民家が建ち並ぶ。

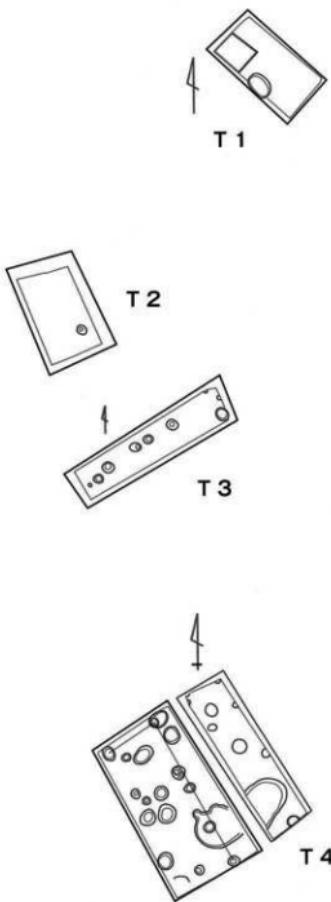
ヲロノ川は「長宗我部地検帳」の「加久見村地検帳」にも「ヲロノ川」として屋敷地の記載があり、平成2年に本調査地の西側、加久見区帳場敷地内において実施された市村教授の発掘調査においても知られるように、家臣団屋敷が存在したことは明らかである。

調査区は、上城山南麓の古民家の跡地に2箇所(T1・2)とその前面の庭及び畠に2箇所(T3・4)の調査区を設定した写真(1~3)。

このあたりの古民家は、盛り土の外側に石を配した基壇上に礎石を配するもので(写真1)、加久見氏居館もそれと同様の基壇が推定されており、本調査地においても屋敷地の確認とともに建物構造のあり方にも注目して調査を実施した。



第1図 ヲロノ川調査区位置図 (1:2,000)



第2図 調査区配置図 (1 : 80)



写真1 調査前状況①



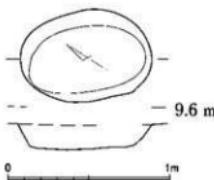
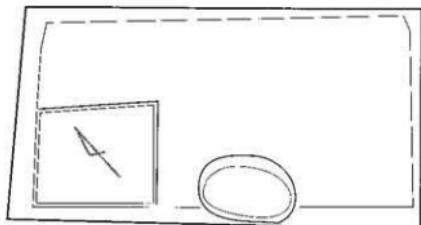
写真2 調査前状況②



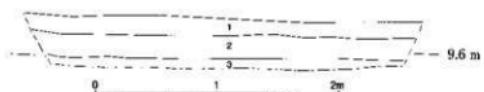
写真3 調査前状況③

T 1・2では、遺構は土坑1基、ピット1本のみで、遺物は出土していないが、これは近代以降にT 1・2の背後の丘陵を掘削することで、宅地を拡げていったためとみられる。T 2では古民家の土間と見られる整地層が確認されたが、その下層は礫を多く含んでおり、背後の丘陵からの土石流堆積層である。

遺構を検出したのは、T 1・2の前面のT 3・4である。表土下に厚さ20cmの包含層があり、そ

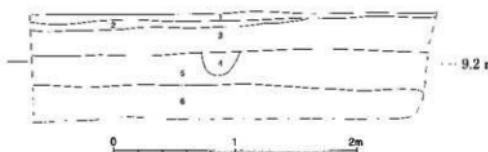
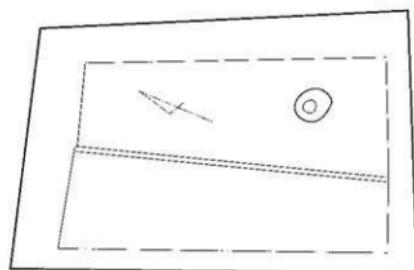


第4図 土坑1平・断面図 (1:30)



- 1 淡灰色土
- 2 褐灰色土(礫含む)
- 3 暗褐色土(礫含む)

第3図 トレンチ1平・断面図 (1:40)



- 1 淡黄色土(礫含む:宅地整地 I)
- 2 淡灰色土(礫含む)
- 3 褐灰色礫層
- 4 灰色土(柱穴埋土)
- 5 淡褐色土(礫含む)
- 6 暗褐色礫層

第5図 トレンチ2平・断面図 (1:40)

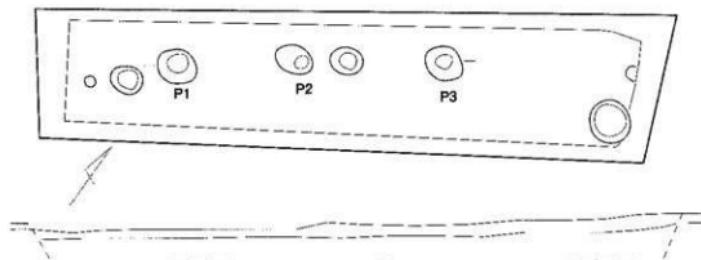
の下面において柱穴及び掘立柱建物とみられる柱穴列を検出した。T4では、南側の谷筋に向かってさらに地形が1段低くなっている。それから判断して建物規模は2×3間程度とあったとみられる。

遺物の出土もT3・4のみは、量的に少なく、細片ばかりであった。

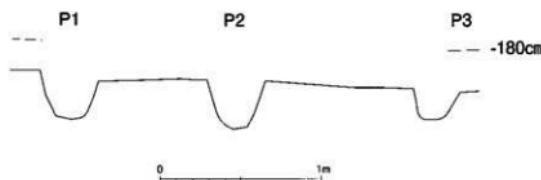
1から5は備前焼である。1・2はⅢ期の擂鉢であるが、焼成はともに軟質である。3・4はⅣBからV期の擂鉢である。5は壺の肩部片である。6は常滑焼である。胎土に砂粒を多く含み、焼成も土師質に近い。時期は、13世紀後半に位置づけられる。7・8は瓦質土器の鍋と擂鉢であり、14世紀後半から15世紀前半の所産である。9は中国製大日碗で建窯産とみられる。14から18は青磁で、器種は碗のみである。17はT3のピット2から出土した、体部に飛雲文のみられるI類の碗で、9と同じ13世紀代に位置づけられる。そのほかの雷文体の15、細蓮弁文の16・18などは、15世紀から16世紀初頭である。14は無文の碗であるが、同時期であろう。緩やかに外反する頸部に斜行する工具痕がみられる。釉は薄いものの、胎土は比較的精良である。

19は景徳鎮産の青花で、外底部に釉ハギを施す。時期は16世紀前半とみられ、他に体部片数点がみられる。土師質土器杯皿類には、大10、小11・12がある。13は羽釜の鋸片である。

金属器・土製品では、米銭（皇宗）21、土鍤20がみられるほか、図示していないが、青花（図版20-22）は16世紀後半の資料である。瓦質土器鍋の底部（図版20-23）、鍛冶滓（図版20-24）



第6図 トレンチ3平・断面図 (1:40)

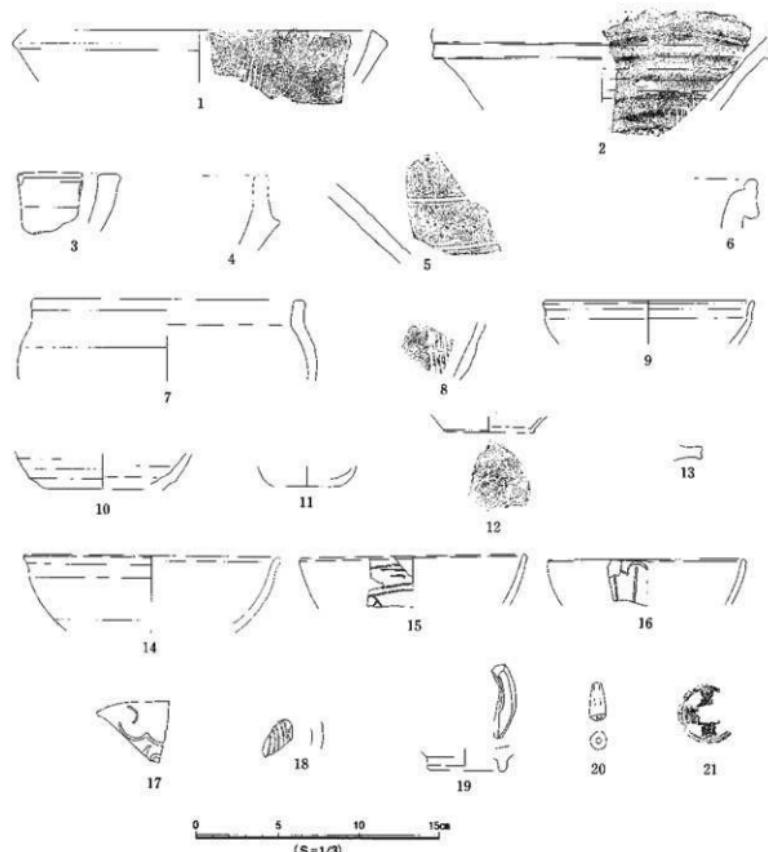


第7図 柱穴断面図 (1:30)

のほかに近世の陶磁器類も出土している。

検出した遺構面は1面のみであったが、本調査地が加久見氏家臣团屋敷の一部とみてよいであろう。建窯産天目碗を入手するなど加久見氏の交易力を物語る。

柱穴から1類の青磁碗が出土や備前焼、常滑焼などの時期から加久見氏居館跡と同様、屋敷地が鎌倉時代にさかのぼり、それ以降江戸時代にかけても屋敷が存在したことが明らかとなった。居館部分の調査では、16世紀代に衰退することが指摘されているか、周辺の家臣团屋敷はこれと期を一つにするわけではなく、在地のまま近世をむかえるようである。



第8図 遺物実測図 (1:3・1:2)

第4節 蛙田地区の調査

加久見平野部の西側は、標高54mの宝山によって限られる。この宝山の山裾は、加久見氏居館の位置する東側の山裾とは対照的に人家が建て込んでおり、現在も古民家が点在する。宅地はいずれも山裾を削って平坦部を造り、全面に石垣を配するもので、山裾を走る現在の市道と比べ1.5m程高い。これは低地部分が可耕地として利用されたためとともに、加久見川の氾濫を避けるためであったと考えられる。

高知大学の市村高男教授によると、調査地のある上蛙田は下蛙田と会わせて『長曾我部地検帳』『加久見村地検帳』の記述にあるホノギ「カツタ」の音が転じたものではないかとの見解をしめされ、11筆の家臣団屋敷と加久見氏の弓場所の存在を想定されており、当調査地も加久見氏の家臣団屋敷の一部であることも想定できる。

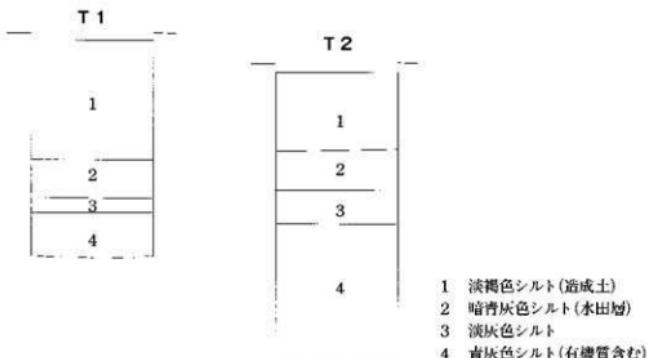
調査は、宝山東裾を造成した宅地跡で住宅基礎部分をさけその両側に2箇所(T3・4)及び市道を挟んだ東側で水田を埋め立て造成し、現在は空地となっている部分に2箇所(T1・2)と計4カ所のトレンチ調査を行った。

このうちT3・4では、宅地による搅乱があったものの土壌、掘立柱建物の柱穴と屋敷地の整地層を確認しており、鎌倉時代から江戸時代にかけての遺物が出土している。

T3では、表土直下に中世から近世にかけての包含層がみられ、包含層除去後、遺構面1面を確認し、土坑、柱穴を検出した。この遺構面は、褐色の土を多く含む層で、深さ60cm程度掘り下げたが地山を確認できなかった。丘陵裾分を宅地として造成した際に形成された層であろう。



第1図 蛙田地区調査区位置図 (1:3,000)



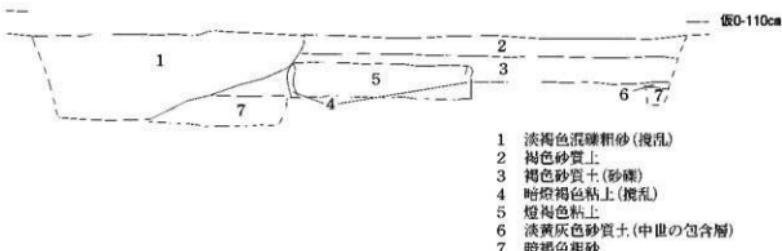
第2図 トレンチ1・2土層柱状図 (1:40)

T 4は、旧宅の離れの跡であろうか、擾乱が著しいものの、中世から近世にかけての遺物及び一部で旧屋敷の整地層を確認した。

出土遺物としては、土坑1から出土した瓦質鍋1があり、時期は、14世紀後半から15世紀にかけてである。柱穴2からは、上面で肥前陶器染付2、伊万里皿4・碗5が、底部からは青磁碗3が出土しており、3が15世紀後半、2が17世紀後半、4・5は18世紀代に属し、建物の成立や廃絶時期の一端を窺い知ることができる。柱穴3からは、白磁口禿皿6が出土している。時期は、13世紀末から14世紀前半の所産である。

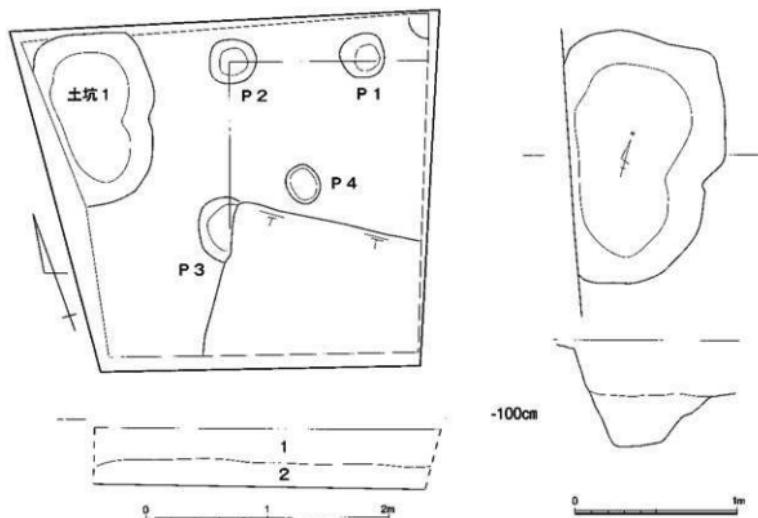
包含層中ににおいても、細片ながら遺物がみられた。

土師質土器焰錫鍋10は、15世紀後半から16世紀代にかけてのものである。細蓮弁の青磁碗8、口禿白磁皿7が出土している。その他には、伊万里紅皿の蓋12や瀬戸美濃窯の天目11は17世紀代がみられる。さらに図示していないが、唐津刷毛目皿(図版21-15)、内野山焼の碗(図版21-16)は17世紀後半、その他にも土師質土器皿が出土している。



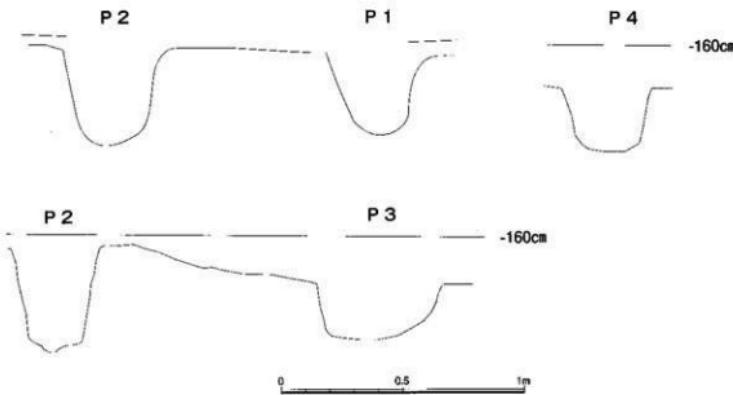
第3図 トレンチ4土層断面図 (1:40)

T 1・2は現地盤高でT 3・4より約15m低い。トレンチの層序をみると、地表下に厚さ60cmの造成土がある。その層の下で現代の水出土とその床土があり、その下層は、分厚い粘土の堆積層がある。

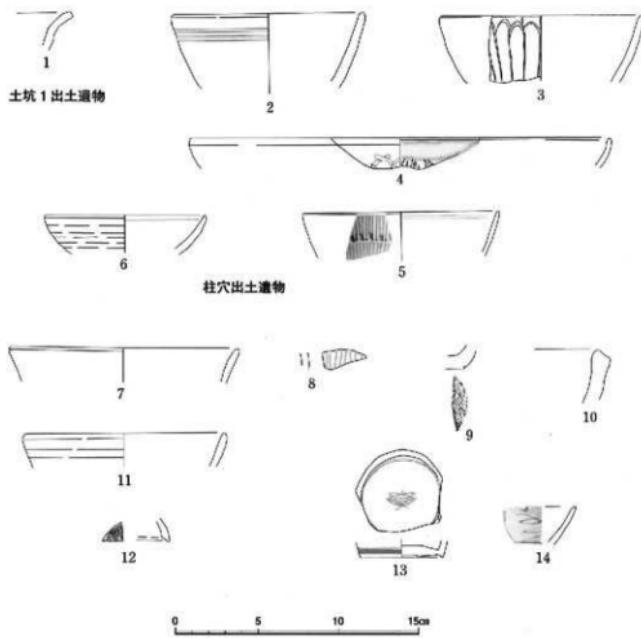


第4図 トレンチ3平・断面図 (1:40)

第5図 土坑1平・断面図 (1:30)



第6図 柱穴断面図 (1:20)



第7図 遺物実測図 (1:3)

この粘土層は数層に分層が可能であったが、深さ2mで崩落の危険があるため掘削を中止した。深さ約2m付近において木や植物等の有機質土の堆積を確認しており、湿地帯の様相を呈していたとみられる。現在の加久見川は、昭和に付け替えられたもので、旧河道は耕地整理前の航空写真や水路、あぜ道にその痕跡をとどめるように加久見平野の北東から南西に向かって流層していたと考えられ、今回の調査においてもそれを裏付けることができた。

T 1 からは 13、T 2 からは 14 と、第3層中より 18世紀中ごろの伊万里焼碗が出土していることから、少なくとも江戸時代には水田として利用されていたとみられる。

当調査地は、中世から現代にかけて宅地として繰り返し利用されてきたとみられる。その結果、出土遺物は少なく、細片が多いものの 14世紀代には屋敷地が成立した可能性が強く、加久見氏家臣團の屋敷のひとつであろう。

さらに江戸時代にかけて存続したことが明らかとなったが、近世においても、伊万里紅皿や瀬戸天目などを入手するほど富裕層として存続したこと興味深い。

第5節 泉慶院地区の調査

以前より加久見平野北西部の小さな谷筋に五輪塔の散在が知られていた。地元で「センケ」と呼ばれる地区で、字は上城山・矢熊に相当する。その谷の南側では、加久見川は宝山の北裾との間の狭い箇所を大きく蛇行し、やがて加久見の平野へと流走する。

高知大学教育学部の市村高男教授によって、「せんけ」には『長宗我部地検帳』に記される泉慶院という加久見氏ゆかりの寺院が存在したことが明らかにされている。現状はしきび畠やその畠跡として3段の平坦面となっており、今回の調査地下の中・下段は平成18年に市村高男教授を中心とする発掘調査が行われ、柱穴などの遺構や中世の遺物が出上ったことから泉慶院遺構との関連付けがなされている。ただし、泉慶院が香仏寺にみられるように基壇と礎石が仏堂の下部構造であれば仏堂そのものの痕跡は削平されてしまった可能性は否めない。

この泉慶院跡調査区の北側には、調査前には荒地となっていたものの、かつて畠として開墾された平坦面があり、さらにその4m上方を東西に走る山道との間の斜面には、東西10m、南北3mの範囲にわたって五輪塔・一石五輪塔・石仏と五輪塔の基壇とみられる石材約150基が散在していた(第1図)。これらは聞き取りの結果、石塔類は近年まで信仰の対象となっていたようで、花立て等の現代陶磁器類も散乱していた。また、石塔類は南側の宝山北の丘陵など近在から持ち運ばれたものも多いというが、宝山北丘陵には現在も五輪塔が散見されており、この地に五輪塔が持ち運ばれた理由についてはついに聞くことができなかった。本調査地の周辺に散在するいくつかの石塔類を本調査地に運んだことが事実にしても、泉慶院の一舟には墓地が形成されていたとみるべきであろう。そこで、墓坑など石塔類の下部構造が存在するか否か、石塔のなかに原位置を保つものがあるかを調査の目的とした。

石塔類には、五輪塔のほかに、一石五輪塔59基と石仏42基がみられるほか、返花座のみられる基壇8基、台石(平坦面が1面みられ、石仏、供物などを安置した台と想定する)2基がある。なお、宝篋印塔の部材が確認できていないこと及びその法量から、基壇は一石五輪塔と組み合わさるとみてよい。これらは、破片を含め総数147点を数える。

石塔群は、調査開始時の草刈後の状態からほとんどが表土上に横転した状態で、五輪塔、石仏が混在した状態であったが、斜面上方で自立していた40~42、69~71が元位置に近い可能性が考えられた(第2図)。このうち71は基壇とみられるもので、T5の地山上で検出した。この他にもT4において、砂岩製の台石が1点出土している。

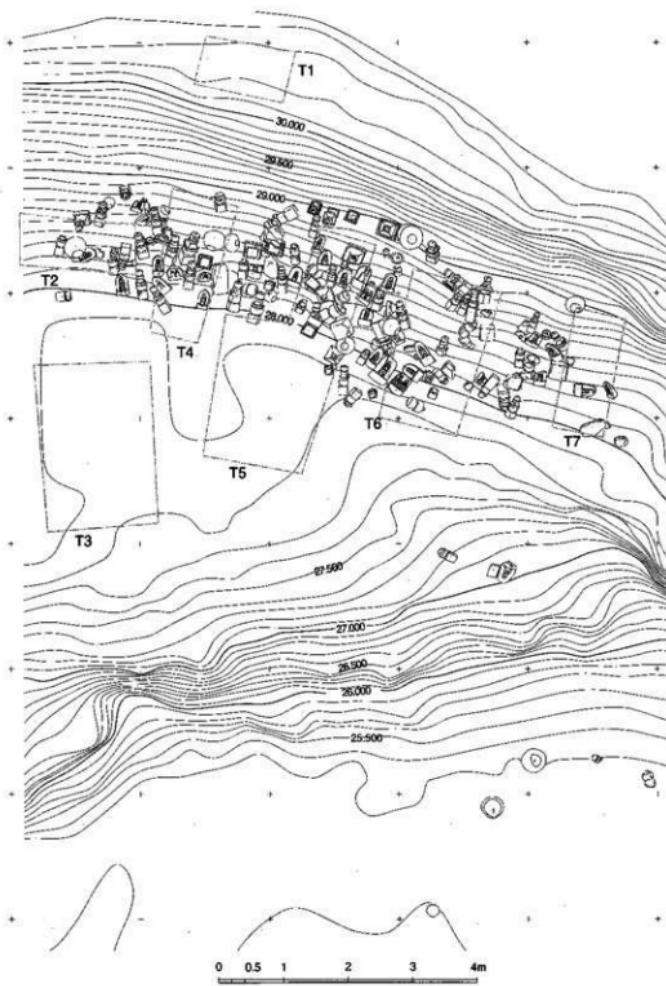
五輪塔と石仏の数量が近似すること。両者が混在する検出状況は、寺院墓地の通常の片付けとは異なるあり方で、他所から持ち運ばれたにしても両者がともと墓標と供養塔として組み合わされて存在しており、それが意識され配置されているとみなすこともできよう。

トレンチは畠跡の平坦面に設定したT3のほかは、石塔類が散在する斜面を中心にT2・4~7、斜面上方の道とみられる1m幅の平坦面にT1と計7か所を設定した。

T1では表土下に丘陵の岩盤を確認した。

T5・6では地山を整形した2段の平坦面の痕跡がみられたものの(第4図)、T5では墓坑などの下部構造は存在しなかったことから、石塔類を整理した段階で平坦面が整形されたのであろうか。T6では、地山を掘削した墓坑の痕跡を検出したものの(第3図)、遺物等は見られなかった。この

平坦面は幅40cm程度と狭くかつ墓坑の造存状況が良いことは、この下方を畑として開墾する際に地形の改変が行われたことを示すのではないだろうか。また、石塔群散布範囲の東西に設定したT2・7では、平坦面は確認できなかったが、T2では石列を検出している（図版15）。のことからも平坦面と石材散布範囲の関係が窺われるが、平坦面造成の時期については特定できなかった。

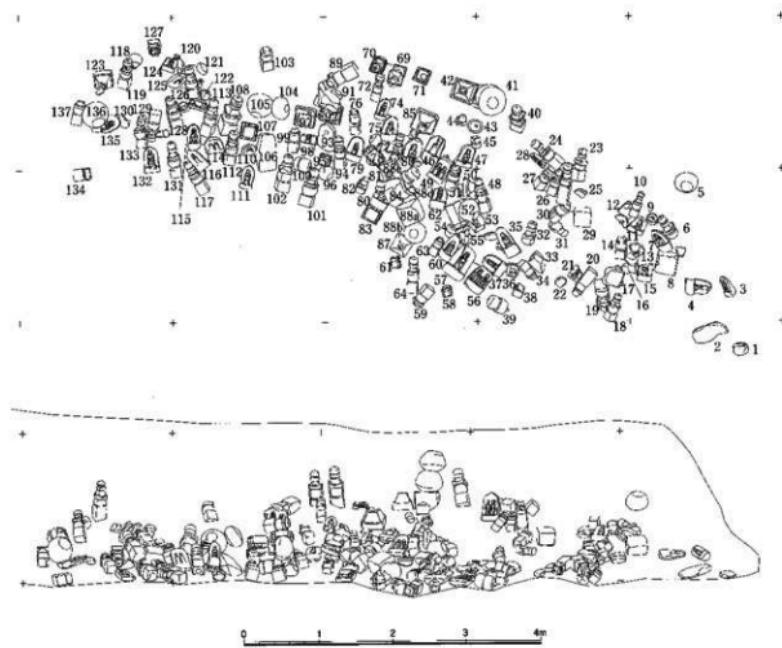


第1図 泉慶院調査区石造物・地形測量図 (1:80)

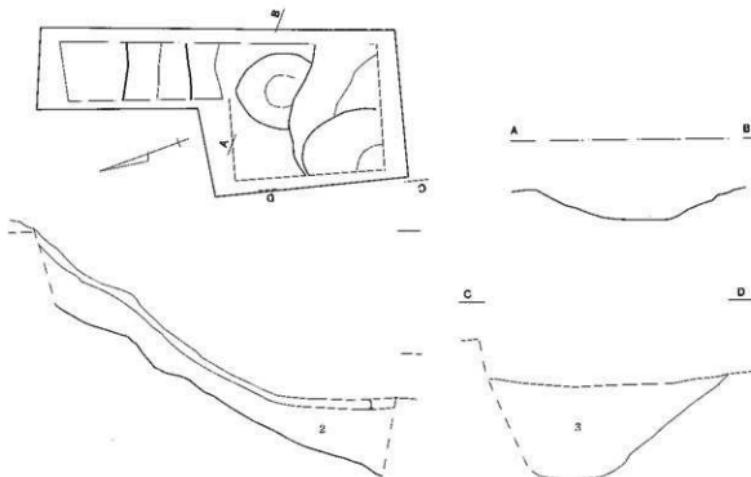
トレンチT3の土層断面からは、下段の畠地に向けて下がる斜面堆積層が確認できた。その層中には3~5cm程度の円窓が多く存在していた。これは当初石塔の周囲に敷かれていたと考えられる。また、陶器窓片1点が出土しており、骨臘器とみられる。さらに周開踏査の結果、調査地北東の谷部において墓地造成によるとみられる十段ほどの平坦面が存在することから、その数はともかく、本調査地に当初から五輪塔等が設置されていたことは明らかであろう。

石材は、大半が砂岩製であるが、つくりの精緻なもの、表面に工具痕を明瞭に残すものがあり、時期的な差異のほかに石工・石材産地の違いを示す可能性がある。花崗岩製では、五輪塔空風輪1点、火輪1点、水輪2点、地輪2点のほか、一石五輪塔4点、石仏1点、基壇1点、白石1点がある。凝灰岩製では、石仏1点のみがみられる。

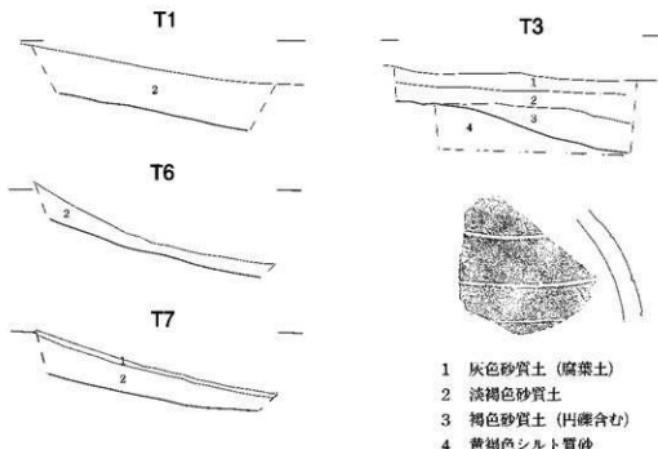
一石五輪塔には、梵字を刻むもの24・59・129・131や、地輪に蓮華を彫るものに27・72・73・94がある。また、長足五輪塔には空風輪を別造りにするもの20や、地輪内に地蔵尊を肉彫りするもの51がある。梵字を刻むものには造りの精緻なものが多く、蓮華を彫るものや長足五輪塔は表面に鑿痕をよく残すようである。これら一石五輪塔は、形態からは4類に分けられそうで、おもに時期差を表すと考えられる。



第2図 石塔・石仏等・立面図 (1:60)



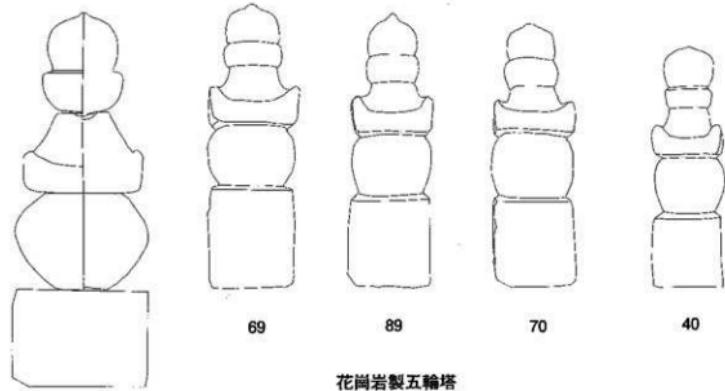
第3図 トレンチ5平・断面図 (1:60)



- 1 灰色砂質土(腐葉土)
- 2 淡褐色砂質土
- 3 棕色砂質土(凹溝含む)
- 4 黄褐色シルト質砂

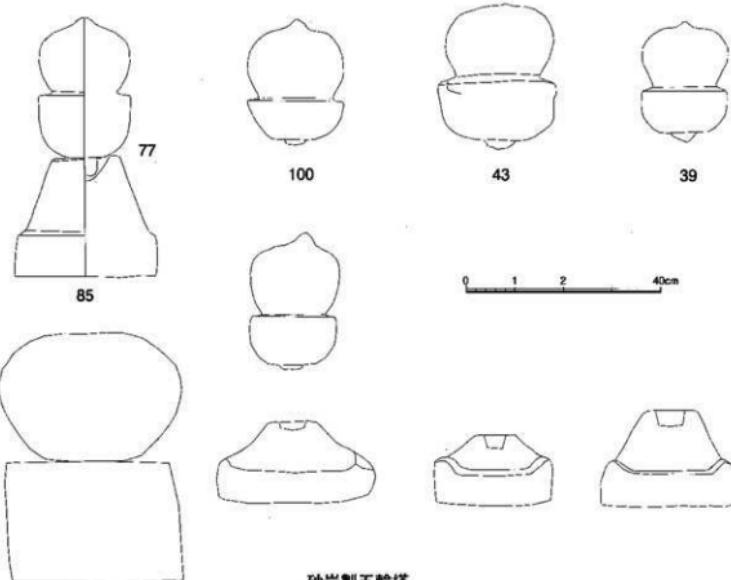
第4図 トレンチ1・3・6・7断面図 (1:40)・トレンチ3出土遺物図 (1:3)

石仏はすべて地蔵尊で、大きく3類別があるようであるが、産地と併に時期差を示すとみられる。基壇についても、三型式に分けられる。なお、五輪塔・石仏とも銘文等を施すものは見られなかった。



花崗岩製五輪塔

88

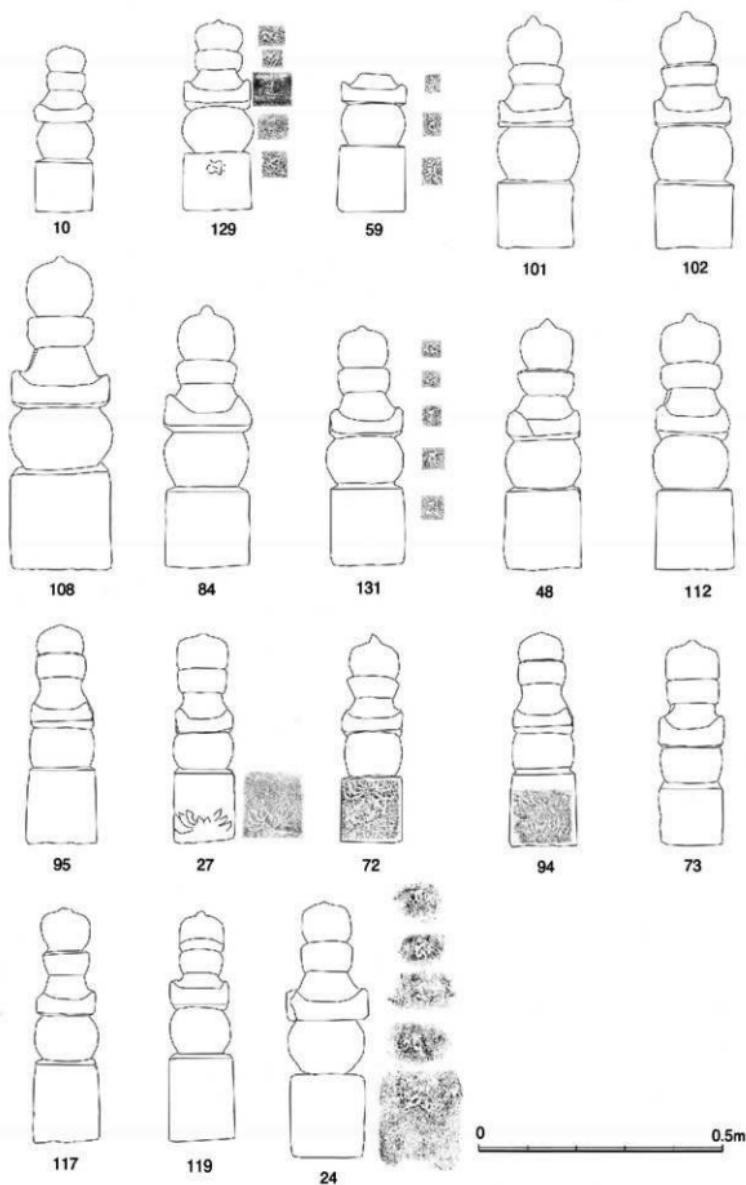


0 1 2 3 40cm

砂岩製五輪塔

41

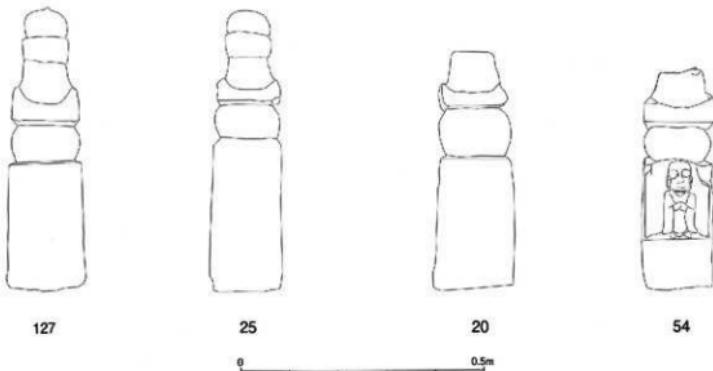
第5図 五輪塔実測図① (1:10)



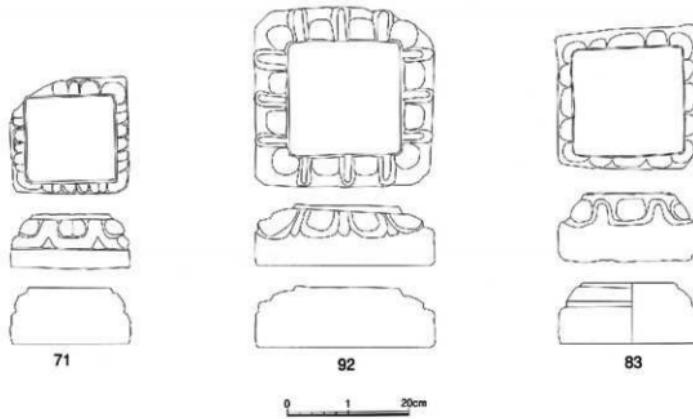
第6図 五輪塔実測図② (1 : 10)

これらが加久見香仏寺の五輪塔などに比べ後出することは明らかであるが両者の関係、泉慶院墓地群の出現と消長についてまとめて少し述べてみたい。

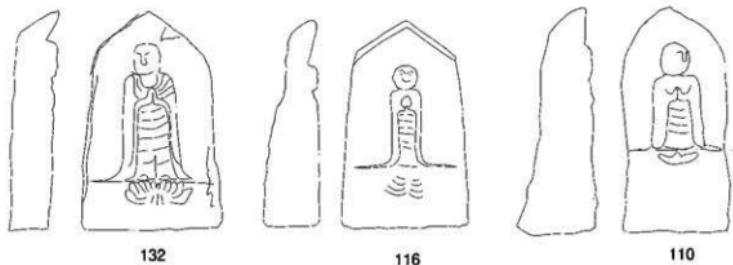
その他の遺物としては、T 3で陶器片1点が出土している（第4図）。壺の肩部片で3条の沈線を廻らせる。表面は被熱により剥落する。産地は東南アジア産と考えられ、骨臓器として使われたとみられるが、これも加久見氏と海外交易のかかわりを示す重要な資料となろう。



第7図 五輪塔実測図③ (1 : 10)



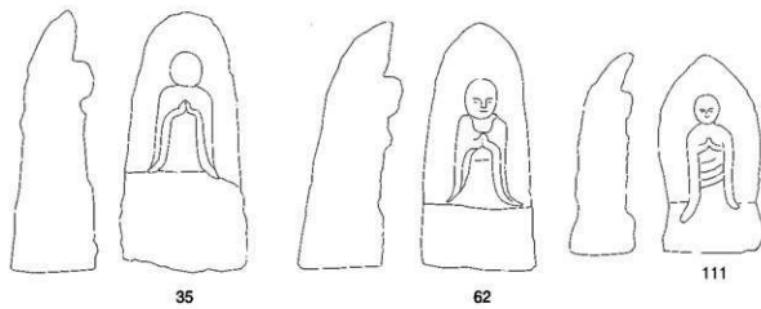
第8図 五輪塔基壇実測図 (1 : 10)



132

116

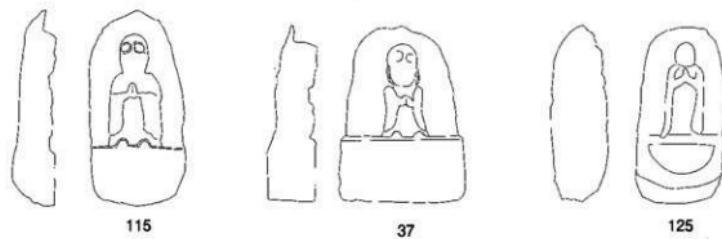
110



35

62

111



115

37

125



第9図 石仏実測図 (1:8)

第4章　まとめ

第1節　中世・加久見地域の景観復元とその考察

(1) 近世以前の加久見川周辺地域の地理的景観の復元

加久見川は、江戸時代以前は現在の流路より西側の宝山の東麓に沿って流れている。土佐藩浦奉行所の行政記録によれば、「養老浦を見みつ宝山と言坂をこして加久見に入る川有」(『西浦廻見日記』、1778年)と記されている(中山, 1980)。この時代、加久見集落に入る手前、つまり宝山東麓に加久見川が流れていることを証明する文献である。

幕末期の加久見川は、大岐集落から続く鷹取山の南麓を稜線に沿って蛇行し、支流ヲロノ川と交差する付近から流路を南西に変え、そこから宝山東麓を稜線に沿って流れ、潮谷を経て、潮江北麓に沿い越湾に注いだと推測される。この流路も時期によって異なり、変化していたと思われる。

幕末期の流路がそのまま中世まで遡れるかどうかは定かではないが、おそらくは現在よりも宝山沿いを流れていることは間違いない。支流ヲロノ川と加久見川が交差する地点から流路を南西に変えている痕跡は、2005年頃撮影された航空写真(株式会社四航コンサルタント所収)をよく見ると地割が旧河道に沿ってなされていることを見ても明らかである(写真1)。この流れは蛙田と呼ばれる小字の方に流れ、そこから宝山西麓、砂間、潮江北麓と流れる。2008年に土佐清水市がこの蛙田を発



写真1　加久見地区的航空写真

土地の地割等から旧河道が推定できる。近世末以前は、おそらく時代により河道は変化していたのではないかと推測される。

小字や地割等から基本的には、加久見氏居館付近の堀本辺りから南西の下蛙田、寶下、砂間、上茶ヶ佐古、下茶ヶ佐古、汐入、入澤等を経て越湾に注いだと推定される。

掘調査し（調査場所は上蛙田）、旧国道より東側の水田は、少なくとも近世以前の水田跡が見え2m以上の灰淡色の粘土層が厚く堆積していた。河身が上蛙田まで流れおらず、下蛙田の方向に流れていた可能性が強いが、この粘土層はおそらく加久見川の淀みの跡であり（写真2）、洪水等によってもたらされた泥地上が厚く堆積して沼のような状態になったためではないか。近世以降それを水田として活用したものであろう。加久見川の河身変更は、1778年以降の幕末から明治期にかけて行われたことは確実である。明治期の地形図（山口ほか、1975）では既に現在の位置に河身変更がなされている（図1）。なぜ、幕末から明治期にかけてこのような河身変更の大規模な土木工事がなされたのか。これは推測の域を脱し得ないが、河身変更後に湿地帯を東に干拓を進め、水田を造成して食糧である米作の増産を図ったからではないか。海岸段丘面の狭い平場しかない土佐清水市域にあって水田耕作をするために適した場所が少なく加久見一帯もその例外ではなかった。自然条件に左右されがちな中で安定した生活を営むために米は貴重な食糧であり、増産したいと考えるのはごく自然なことであり、当たり前のことであった。その結果、加久見一帯は、三崎、益野、下ノ加江等と並ぶ市域有数の穀倉地帯となった。

国道321号線の約500mの直線道路が加久見地区の東西を横切る（写真3）。その中央部に微高地があり、現在ここに諏訪神社の祠が安置されている（写真4）。この祠がいつの時代に安置されたかは定かでないが、おそらく近世末もしくは、近代以降であろう。この神は古代軍神として崇められ、中世は漁業等の神として信仰された。この微高地の西側の小字を「鷲ノ西」と呼ぶ、「鷲」とは微高地のことであると思われる。加久見川が宝山、砂間、潮江山を東に蛇行して流れていくうちに砾や砂が大量に堆積し、流れが緩やかになり、河跡湖のような状態が徐々に形成されていったのではないか。河跡湖とは言ったものの「湖」より「沼」の字を用いた方がより適切かもしれない。この微高地



第1図 明治期の加久見とその周辺の地形

明治38年（1905）測量5万分の1地形図（山口恵一郎ほか『日本国誌体系四国』朝倉書店）における加久見とその周辺の地形である。現在の高知県立清水高校はまだ建設されておらず、荒地になっている。おそらく干潟で水辺の植物で被われていたと推測される。また、北側には針葉樹林の地図記号があり、松原が広がっていた。

加久見川の河身は宝山より東に変更により既に変えられている。



写真2 上蛭田地区のトレンチ

加久見川の淀みによってもたらされたと思われる厚い粘土層が堆積しており、幕末もしくは明治期以降より地域の人々によって水田耕作が成されていったと推測される。



写真3 国道321号直線道路

加久見南部を東西に横切る国道321号線、約500mの直線道路である。このような真っ直ぐな道路が建設され始めたのは1970年代以降である。それまでは山の後線に沿った道がほとんどであった。砂間方向から東方向を撮影する。



写真4 微高地にある祠

国道321号線約500mの直線道路沿いの中ほどに微高地があり、その中心部に諏訪神社の祠が安置されている。

は沼に浮かぶ小島のような状況であったのではないか。あるいは、潮江山自体を嶋と呼んだ可能性もある。流路が賣下辺りから二方向に分れて微高地一帯が川の中洲であった可能性も否定できない。砂間から湾曲して上茶ヶ佐古、下茶ヶ佐古（写真5、6）と流れる潮江山北麓に沿った谷筋の流れと、下畦田から太田、それから微高地にぶつかり、汐入・入澤へと流れる二つの方向の流れがあったのではないか。地形の復元を考えると、一つの方向から判断しては思考が膠着してしまう。さまざまな可能性を探りつつ中世の生活空間を組み立てていかなければならない。小字や地検帳のホノギ等も併せて探っていくことが必要であり、これらを総合的に考え推理すると、河道は一面的なものではなく時期により変化し、移動したと思われる。いずれにせよ満潮時にはかなりの川幅を持っていたであろう。加久見川は大量の土砂を下流や越湾にもたらした。しかし、微高地の部分は、固い岩盤で川の浸食から免れた。現在、そこには3軒ほど家屋が建てられており（写真7）、聞き取り調査によるとこれらの宅地は、微高地を削平したものではなく、水田を埋めたてたものである。

諏訪神社の裏側の微高地の高い部分に花崗岩製の五輪の残欠が放置されている（写真8）。これは



写真5 砂間から上茶ヶ佐古方向

国道から一段低く、山際を自然に水路ができる。それでも幕末から現代にかけてかなり盛土がなされていると思われる。中世の谷筋は埋め立てられてその景観は変化しているが、山肌にその名残を覗うことができる。

この辺を昭和初期まで、地域の人々は、古川と呼んでいた。



写真6 潮江山北麓（東側から）

上茶ヶ佐古、下茶ヶ佐古は現在では稜線に沿って溝がつくられ、50cmほど盛土されて畑地が造成されている。かつてはかなり低い土地で谷状の水辺の土地であったことが見える。



写真7 国道沿いにある微高地

微高地周辺は、周りの地形より高く、地盤が硬い。家屋が数軒建てられている。微高地左側が宅地造成のためか、少し削平されていることが写真から読み取ることができる。



写真8 微高地にある五輪残欠

諏訪神社の祠の裏に置かれていた五輪の残欠（地輪）は、香仏寺に群立するものと同じ花崗岩製である。何ゆえこの場所にあるのか。ここに置かれてあること自体に何か意味があると推測できる。



写真9 香仏寺石塔群

巨大な花崗岩製の五輪塔群が群立する。ややピンク帯びたカリ長石を含んだ御影石は当時としては高級な墓石であったに違いない。「御影石」は積みだされた浜（御影浜）に由来している。

神社が安置される以前からここにあったもので、香仏寺にある花崗岩製の五輪塔（写真9）に石質や形が類似しており、おそらくこれらのように中世から存在するものであろう。以上のような事実から考察していくと微高地一帯が中世段階で墓地だった可能性がある。諏訪神社は地鎮のために後世に建立されたか。あるいは、別の場所にあって移動された可能性がある。一条教房の伝説が残る四十万市津藏洞ではこのような微高地に墓地が形成されている例が見られる（写真10）。

宝山東麓（寶下）から秒間に東に蛇行して流れた加久見川流路は、潮江山の北麓の稜線に沿って東に流れ、越浦に注いだと思われる。潮江山北麓の稜線沿いに「上茶ヶ佐古」（西側）「下茶ヶ佐古」（東側）という小字が残る。「佐古」とは細く行き詰ったような谷であり（中山襄, 1970）、近くを加久見川が流れていた可能性が高い。微高地東側の現在の加久見川と国道321号線の交差する辺りの小字名を「沙入」と言う（写真11）。天正十一年（1589）『土佐国輪多郡賀久見村地検帳』のホノギにも「シオ入り」は登場する。この近辺は現在も満潮時には海水が逆流してくることから、中世段階から同じ現象が生じていたと思われる。

昭和30年頃の越湾に注ぐ加久見川河口部の左岸は、岩盤である。現在でも国道からその岩肌を確認することができる。これを削り川面より2~3mの高さで石垣を築いて、加久見と越浦の陸上における連絡路としている。『日で見る幡多100年』（郷土出版社、2007）を見ると荷馬車が一台やっと通れるくらいの小道である。おそらく、この小道がつくられたのは近代以降であって、近世以前の陣路は現在の加久見入沢町の西側から市ヶ谷坂を越えて越浦や現在の越前町方面に抜けた。

昭和23年（1948）米軍撮影の航空写真を観察すると河口部右岸には、まだ、清水高校が建設されておらず、この部分はほとんどが干潟である（図2）。近世段階から砂礫の堆積が見られ、19世紀初めに描かれたと推測される高知県立歴史民俗資料館所収の浦絵図でも加久見川の砂の堆積により湊として使用できる場所が縮小されていった実態が記されている。逆に、中世段階では、これらの干潟がまだ形成されておらず、遼阔の海でかなり広い河口部と越湾の広がりがあったことを想像することができる。このような自然環境の変化が加久見氏居館と海との関係を徐々に断ち切っていった（市村, 2008）。2008年度の加久見氏居館跡発掘調査においても土鍬が多く出土しており、海運や農作のみならず、普段は漁業でも生計を営んでいたことを裏付けている。以南村の他の浦々と比較してもごくわずかな漁獲ではあるが近世後期に蟹の漁獲があったことが伝えられている（中山, 1980）。また、宝山北麓の尾根筋にある平場（宮ノ子）にあった庵寺跡と推定される墓地に近世初めの越浦庄屋に関連する墓石が今も残る（写真12、13）。墓石の規模や形状等から近世初めから中期にかけて建てられた笠塔婆であり、これを建立できる人物とは越浦から加久見村一帯においてかなり力を持っていた庄屋階級の有力者ではないか。墓石側面左面に「越浦庄屋 □之丞」とあり、その隣に「加久見村 市兵 □」と刻まれ、その中間の上面に「施主」と記されている。施主の二人は死去した庄屋階級の人物とは血縁関係があった可能性が高く、おそらく兄弟であった可能性がある。あるいは墓石の主は「越浦庄屋□之丞」、施主「加久見村 市兵□」と読めば親子である可能性もある。何れにせよ墓石左面に刻まれた二人は、越浦と加久見村に分かれて居を構えていたことは確実であり、側面に刻まれた一方が越浦庄屋であることは注目される。これらの事実は加久見と越浦は地域住民が頻繁に往来して日常的な繋がりがあったことを意味し、一体的な港湾集落であった証拠として捉えることができる。このような関係はおそらく中世まで遡ることができるだろう。他にも中世段階の五輪や一石五輪塔の石塔が数基残っている。



写真 10 津藏潟の微高地

西側から微高地を撮影する。写真には写っていないが、北西部が削平されて畠が造られ、頂上付近には、墓地が造成されている。このように水辺の土地は、水害に備えて高い場所に墓地をつくる場合が多い。



写真 11 小字汐入付近

旧河道は、左手の潮江山側に折れて北麓に沿って流れていると推定される。この付近には満潮になると海水が逆流して過っていた。この一帯は現在でも汽水域となっている。



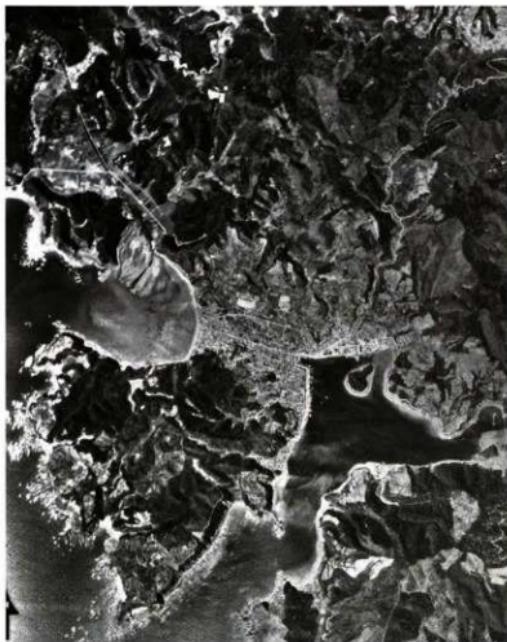
写真 12 宝山北麓にある墓石左面の接写

「越浦庄屋□之丞」、「加久見村 市兵□」は両人ともが施主なのか。あるいは、市兵□が施主で墓石は、越浦庄屋□之丞のものか不明であるが。越浦と加久見の結びつきを連想させる墓石である。墓石には、宝永六年(1709)の銘が残る。

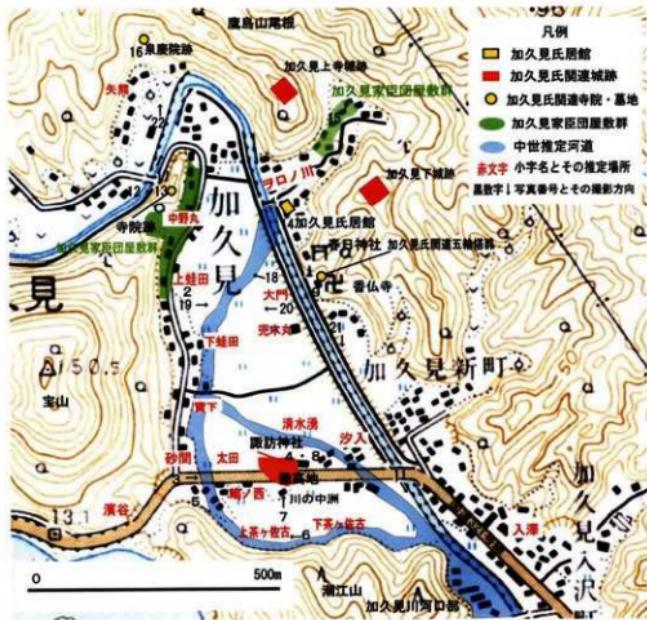


写真 13 宝山北麓の墓石

近世初めから中期にかけて建てられた笠塔婆であり、地域においてかなりの有力者であった人物の墓石と推測される。



第 2 図 1948年米軍撮影の航空写真（国土地理院所収）



第3図 中世加久見地域歴史的景観復元図

第2節 南方貿易における水軍基地としての加久見

2005年～2007年にかけて高知大学教育学部日本史研究室（代表市村高男教授）による科学研究費補助金基盤研究の発掘調査により、これまで伝説の域を超えていた中世段階の加久見地域の概要が次第に解明されてきた。特に、2006年に行われた字宮本での発掘調査では、加久見氏居館跡とみられる遺構や遺物を大量に検出した。ヲロノ川の谷の入り口付近の左岸にある尾根は現在では削り取られ蜜柑畑となっているが、かつては尾根が西側に突き出していた。その尾根と春日神社の尾根との間に居館は建てられていた（写真14）。春日神社の尾根をひとつ越えて加久見氏当主の菩提寺である香仏寺がある。加久見川は、支流ヲロノ川が交差する辺りから中世段階では南西に蛇行したと推定されるることは前述のとおりである。おそらくは、居館のすぐ近くに川湧があり、ここで貿易品である青磁や白磁、花崗岩の五輪塔等の船荷を降ろしたのではないかと思われる。この居館跡の場所比定については、前述の高知大学教育学部日本史研究室が天正十七年（1589）『長宗我部地帳帳』幡多郡下の二の「賀久見村地帳帳」のホノギ等から読み解いたものである。

居館東側の山には中世城郭・加久見下城が所在する。表探遺物から判断して15～16世紀頃に築かれたものではないかと推測される。この城については、『土佐州志』や『南路志』にも加久見氏の所有であることが記されている。この城の北側の鷹取山の丘陵先端部にも加久見上城が築かれている。時期的には下城と同時期ではないかと推測される。また、高知大学教育学部日本史研究室の2005年、2006年の試掘及び発掘調査によるとヲロノ川左岸部の加久見区長場東側の畠地における発掘では川の氾濫跡が残っており、遺物や遺構がないと思われた。しかし、2008年度の土佐清水市による発掘調査では、それよりもさらに東部の谷筋の畠地部分より天日茶碗や青磁等が検出されている。この結果、ヲロノ川の谷筋には加久見家臣団の有力者が住んでいたことが分かった（写真15）。

加久見の北部の宇久熊、地元でセンケと呼ばれている場所に加久見氏に関係するとみられる五輪塔や一石五輪が存在する（写真16・17）。ここは前述の「賀久見村地帳帳」による泉慶院という寺院が所在していたことが記されている。右塔の種類や質から判断すると家臣団の墓石である可能性がある。

2008年度の同市発掘では、宝山東麓の蛭田地区でも山麓の安定した土地で青磁が検出されている。この蛭田や中野丸といった一帯は、「加久見衆」と呼ばれた加久見氏家臣団の重臣である中野氏等が山裾沿いに屋敷を構えていたと推測される場所である（写真18）。

東側に清水から続く山や岩壁（写真19）、西側に宝山（写真20）、南側に潮江山（写真21）、北側に大岐から続く鷹取山（写真22）と四方を山で囲まれ、しかも加久見川の水運を利用し越浦に行き来できる。また、ヲロノ川を一山越えると以布利・広畑に続く。この以布利は、土佐湾内に位置した港湾集落であり、中世では大岐氏が押えていた。この大岐氏の菩提寺である念西寺にも加久見香仏寺と同じく花崗岩製の五輪や一石五輪が多く残っている（写真23・24）。大岐氏は土佐一条氏に大きな信頼を受け、その名代として京都に上洛している（市村、2001）。

以上のように、加久見地域は地域全体が自然の要塞であり、土佐一条氏の南方貿易における水軍基地として機能しており、盆地状の平場に抜けた独自の様相を呈している。



写真 14 加久見氏居館の推定地

現在、畠地になっているこの場所が加久見氏居館があったと推測される場所である。ここからは建物基礎と推定される石列や磁器等が発見された。下城の下に位置し、加久見川の水運を利用してこの館付近まで資物輸送されていたと思われる。



写真 15 ヲロノ川の発掘現場

2008年度には、この畠地付近を発掘調査した。天目茶碗片や青磁片の遺物及び建物遺構が発見された。この付近には家臣屋敷が所在していたと推測される。



写真 16 泉慶院の五輪塔群

和泉砂岩と推測される一石五輪塔や石仏等が多く残っている。2006年の高知大学の試掘調査で墓石群の前の平場で建物基礎が発見されており、中世に存在した寺院跡であることを裏付けた。



写真 17 加久見川とセンケ

泉慶院跡付近、鷹取山の尾根と尾根の間の谷筋を地元では「センケ」と呼ぶ。中世の五輪残欠、一石五輪塔、石仏等が群立して所在している。

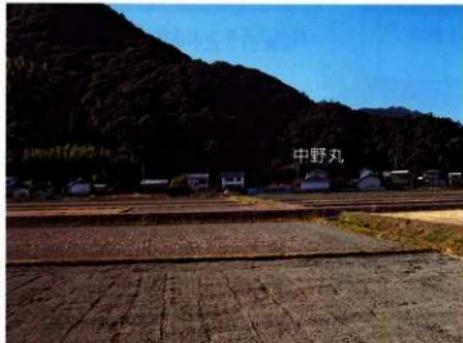


写真 18 字中野丸付近の遠景

宝山北側に突き出た尾根筋のもと付近一帯が字中野丸である。加久見衆の筆頭である中野官兵衛の屋敷がこの付近にあった。地検帳の記述によるとこの付近のどこかに中野氏土居屋敷があったことが分かっている。



写真 19 加久見東側に続く山並

清水とは山が緑のカーテンでさえぎり加久見と隔たる。上蛙田から東側を撮影した。

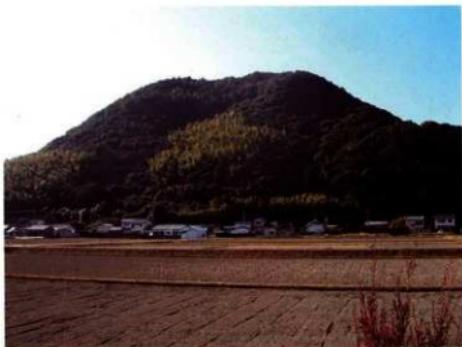


写真 20 宝山の遠景

宝山と書いて地元では「たくらやま」と呼ぶ。加久見地域の西に位置している。碗を伏せたような形をしている象徴的な山である。海上からのシーマークとして利用されたのではないか。



写真 21 北から見た潮江山

西の宝山、北の鷹取山と比べて低い山であるが、加久見の南部を海風から守り、他の豪族の海からの攻撃にも有利な立地であり、防災・防衛の面からメリットがあった。

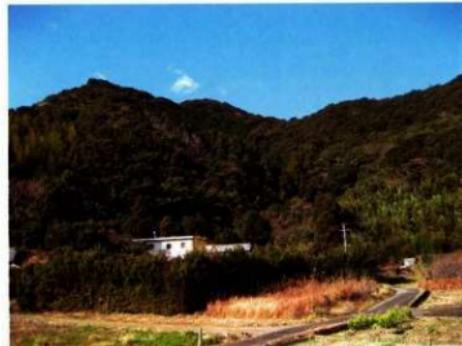


写真 22 矢熊付近の鷹取山

大岐から続く鷹取山（海拔307.2m）の南麓が加久見へと続いている。加久見川堤防から北側を撮影した。

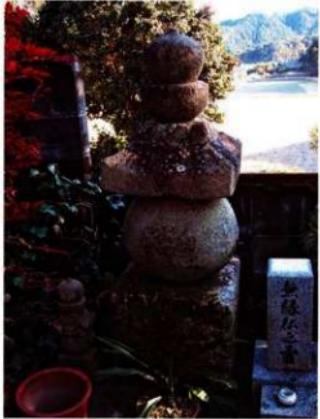


写真 23 大岐・念西寺にある五輪塔



写真 24 旧念西寺境内にある五輪の残欠

(引用・参考文献)

- 市村高男（2001）：第3章武家政権の盛衰と土佐国、第4章戦国の群雄と土佐国、『高知県の歴史』山川出版社。
- 市村高男（2008）：海運・流通から見た土佐一条氏と加久見氏、『海運・流通から見た土佐一条氏の学際的研究 2005~2007年度科学的研究費補助金基盤研究（C）研究成果報告書』西村謄写堂、5 - 34。
- 中山 進（1980）：近世以南の漁業史、四 近世、『土佐清水市史上巻』土佐清水市、753 - 980。
- 中山襄太（1970）：『地名語源辞典』校倉書房。
- 山口恵一郎ほか（1975）：20 高知県、足摺・清水（足摺岬・以布利・下ノ加江）、『日本国誌体系四国』朝倉書店、334 - 336。

第3節 出土遺物からみた加久見氏の地域支配

2年間の加久見氏関連遺跡の試掘確認調査で、調査面積に比べると多くの遺物が出土している。当時幡多荘の最西端に位置する以南村で、これほどの小面積の調査で遠隔地の各地で生産された製品が出土することは、この地を支配した加久見氏の流通や交易にかかわった証であるとともに、一条教房の外戚となり土佐一条家を起こしその後一条家の家臣団を取りまとめるほどの勢力を持った加久見氏の権力構造を分析できるひとつとなるものである。

出土遺物の中で、注目されるものとしてはまず楠葉型の瓦器碗がある。形態や、内面の細く明瞭な暗文が特徴的で、土佐を含む四国一帯で出土する普遍的な瓦器碗（和泉型）とは異なる。宮本地区第9図の8は焼成も良く、外面のナデ以前の布痕や高台の胎土の違いなども観察できた。12は口縁部の細く強いミガキにより8、6との関連が考慮される。瓦器としての焼成等は比較的良いだけに、内湾する口縁形態と併せて土佐では非普遍的なものといえる。

瀬戸内地域を含む四国における瓦器碗の分布をみると、12世紀末以降の「和泉型」は沿海部の不特定多数の遺跡で出土する。「楠葉型」は初期の11世紀代のものが各地の官衙関連遺跡等で少数出土するが、12世紀末葉以降は出土遺跡数がむしろ減少し、極めて限定的になることから（橋本1992）、遺跡の性格と強く関連する遺物であることが推定される。

13世紀以降の楠葉産瓦器に関する先学によると、13世紀後葉の「輪花碗」と呼ばれるものや杯型の特殊な器形（以下、「輪花碗等」と略）が、京都、鎌倉、博多で一定出土し、その他の地域では地方政治や交通の拠点に限って少數が搬入されているという分布状況や、器形の特徴から、当時の幕府による海上交通の支配・再編に関連付ける見方がある。今次の調査で出土しているのはこのような特殊な器形ではないが、通常タイプのものも該期には極めて限られた遺跡でしか出土せず、しばしば輪花碗等と共に出土していること等からみて、上記に準ずるような遺跡に搬入されているものと推察される。

瀬戸内地域を含む四国では、貿易陶磁器や瓦器が12世紀末～13世紀初に急増した後、13世紀中～後葉からは東海製品や吉備系の土器の移動・流通が始まっており、広域・中域規模の流通や交通が活発化していることを示す。上記した楠葉型輪花碗等の出土例の中に、鹿児島県や岩手県の例があることにも注目すると（橋本2006）、今次出土の瓦器碗にも、当該期における交通の再編と変質の中で、列島沿線の交通の要所で出土した事例としての意味が考慮される。踏み込んでいえば、13世紀中～後葉における本遺跡の成立に、当時の幕府権力による海上交通の再編策が関連している可能性を考えられよう。

なお、土佐で13世紀後葉以降に位置付け可能な楠葉型瓦器碗が一定出土しているのは四万十川下流域の共同中山遺跡群とアゾノ遺跡のみで、四国でも稀少な事例である。12世紀末～13世紀初葉頃に位置付けられるもので、今次報告した瓦器碗に先行する。文献からみると、攝關家が土佐への関与を強め、幡多地域を莊園化する時期にあたる（状他2001）。土佐中央部で同時期の楠葉型瓦器碗の出土例がないことを踏まえると、土佐西南部での出土は、他地域とは異なる中央政権との関係を示している可能性がある。

13世紀代の貿易陶磁も多く出土している。青磁窯蓮弁文碗などは、瓦器碗の和泉型、楠葉型とともに13世紀中～後葉、白磁口禿皿は13世紀中葉～14世紀初に位置付けられる。中でも、43～45の

青白磁梅瓶などは威信財として存在したもので、41・42の天目茶碗なども同様と考えられる。

四国における古代後期から中世前期の搬入品の出土傾向をみると、12世紀末～13世紀初頭頃のものから急増する遺跡と、13世紀前葉～中葉から繁栄が始まる遺跡がある。今次出土遺物中には13世紀初頭以前に遡るもののが存在せず、後者に属する。なお、本遺跡の成立期については、青磁よりも使用期間が短いとみられる瓦器を指標とするのが適当である。14世紀の貿易陶磁器減少は四国でも普遍的な現象で、今次出土遺物中にも積極的に当該期に位置付けられる搬入品が見あたらないが、土師質土器には14世紀に入る可能性があるものも一定あり、遺跡の消長を考える場合にはそれらの詳細な検討を要する。15世紀代では、青磁盤や細蓮弁文碗、白磁皿などが確認できる。

次に中世後期の国産陶器類についてみると、東海製品が一定数出土しており、宮本地区第10図に掲載している瀬戸類の深皿（26）や平楕（25）からみて15世紀代、19の常滑は15世紀初葉に位置付けられる。特に瀬戸は一定数みられ、器形はその他に卸皿がある。当該期の東海製品の四国における分布状況をみると、瀬戸内側では少数の遺跡に集中して出土し、太平洋側では瀬戸内側よりも多くの遺跡で出土するが、1遺跡あたりの点数は少ない傾向がある。本遺跡でみた瀬戸の出土点数については、調査面積や遺物総量に比してやや目立つようである。21の「亀山系」壺の破片の出土など瀬戸内地域に分布する備中・亀山窯系の製品は、太平洋側には普及せず仁淀川や四万十川といった主要河川下流域の、水運との関連が特に強い遺跡でごく少数を認めるのみである。搬入品の瓦質土器火鉢等も一定数がみられ、胎土等からみて確認できたものはほぼ全てが大和方面からの搬入品の奈良火鉢類とみられる。

その他の器種では2の土師質土器が注目され、京都系土師器皿を在地の技法で模倣した可能性が高い。在地産の瓦質土器は、15世紀代に位置付けられる「土佐型鍋」が出土している。このような在地の皿や土鍋は、これまで資料が一定蓄積されている土佐中央部の事例（松田1987・吉成2007）を中心に論じられてきた。今次は調査面積が狭小でこれらの遺物も僅少だが、今後土佐西南部での比較を行うことにより新たな視点となり得る。

以上、出土遺物の概要をみてきた。このうち搬入品については、これらを一定数確認した遺跡としては四国で最西南端の事例となり、地理的には豊後水道と太平洋航路の分岐点で九州東部・南部方面にも開かれた位置である。既述した種々の搬入品の様相は、生産地や集散地と当地の間の流通・交通を示しており、さらに豊後水道や九州南部にもつながる可能性が考えられよう（池澤2005）。また、そのことが、当地を拠点として発展し一条氏の下向後はその権力を支える存在となった加久見氏の存立要因であるとみられる。本遺跡では貿易陶磁器をはじめ東海地方までの搬入品を多数人手できる勢力の存在が確認でき、その系譜が13世紀中～後葉に遡ることが明らかになった。15世紀の様相は加久見氏に結び付けられると考えるが、13世紀の様相と加久見氏との関係については直ちに言及できない。また、遺跡の消長について、16世紀に位置付けられる遺物がほとんど出土しておらず、青花は確認していないことから、それまでに本遺跡の繁栄は終焉を迎えたと判断される。そしてそれは、加久見氏が土佐・一条氏との関係を深めた後の動向を示していると思われる。

今回の考古学的成果からは、新たな知見が得られるとともに様々な課題もみえてきた。文献分野も含めて、更なる調査・研究が望まれる。

参考文献

- 池澤俊幸 2005 「四国における搬入品と流通・交通」『中近世土器の基礎研究 XIX』日本中世土器研究会
- 荻慎一郎、森公章、市村高男、下村公彦、田村安興 2001 『高知県の歴史』山川出版社
- 橋本久和 1992 『中世土器研究序論』貞陽社
- 橋本久和 2006 「楠葉型輪花椀の分析」『喜谷美宣先生古稀記念論集』喜谷美宣先生古稀記念論集刊行会
- 松田直則 1987 「高知県における中世土器の様相－15・16世紀を中心にして－」『中近世土器の基礎研究Ⅲ』日本中世土器研究会
- 吉成承二 2007 「四国の土製壺・羽釜・鍋－古代末から中世の土製煮炊具の様相－」『中近世土器の基礎研究 21』日本中世土器研究会

第4節 泉慶院五輪塔調査補遺

はじめに

平成20年度に調査を行った泉慶院調査区は、五輪塔、石仏が150基近く存在している。第2章に述べたとおり、墓坑やその上部構造をなしていたとみられる円礎の存在、骨臓器とみられる陶器片などから加久見氏ゆかりの泉慶院に付属する墓地跡と考えられる。板碑型墓標等が見られないことからこの墓地は泉慶院とともに江戸時代初めには廃絶し、今日に至ったようである。

土佐清水市内の石造物を詳細に調査された松田朝由氏は、高知県内の中世石造物の展開は六甲花崗岩製の搬入とともに開始され、地元砂岩製石造物もその影響下に製作が開始されたこと。その後、15世紀後半には在地砂岩製石造物の大量生産という大きな画期があること。土佐清水市内では、それまでと対照的に六甲花崗岩が少ない地域となり、市内の五輪塔等は和泉砂岩製五輪塔の影響を強く受けていること。その後独自の変遷とたどること等を指摘された。この地の一石五輪塔群は、まさに15世紀後半以降の変遷をうかがう良好な資料といえる。

また、土佐清水市内でも覺夢寺や香仏寺に比べ墓地の形成は遅いものの、15世紀以降の一石五輪塔や石仏がまとまって存在している。

今回の調査目的は、現状での石材散布状況の記録、および石塔の下部構造の追及を主とし、各石塔についての計測等を十分には実施していないが、若干の検討を加えることで今後の課題を明確にしておきたい。なお、本稿では一石調成五輪塔も含んだ広義の名称として一石五輪塔という呼称を使うことにする。

1 一石五輪塔

圧倒的多数を占める砂岩製を中心にみると、当墓地において最古段階に位置づけられる一石五輪塔に10・129がある。129は和泉砂岩製の搬入品とみられ、全高は42cm、地輪の幅が14.5cm、高さは12.5cmを測る。水輪は横長の長円形で、空風輪は上部で肩の張る宝珠形をなす。梵字を刻むが銘文はない。大阪府下の紀年名資料から、15世紀後半に位置づけられる。これ以降五輪塔と一石五輪塔は共存しながら展開してゆき、形態の特徴から以下の4群に分けられる（第1図）。

1類 60cmを超える一石五輪としては大型品（108）などがあり、地輪の形状が正方形に近く、宝珠は球形に近い。

2類 1類に比べると、地輪の幅に対し高さが増す。

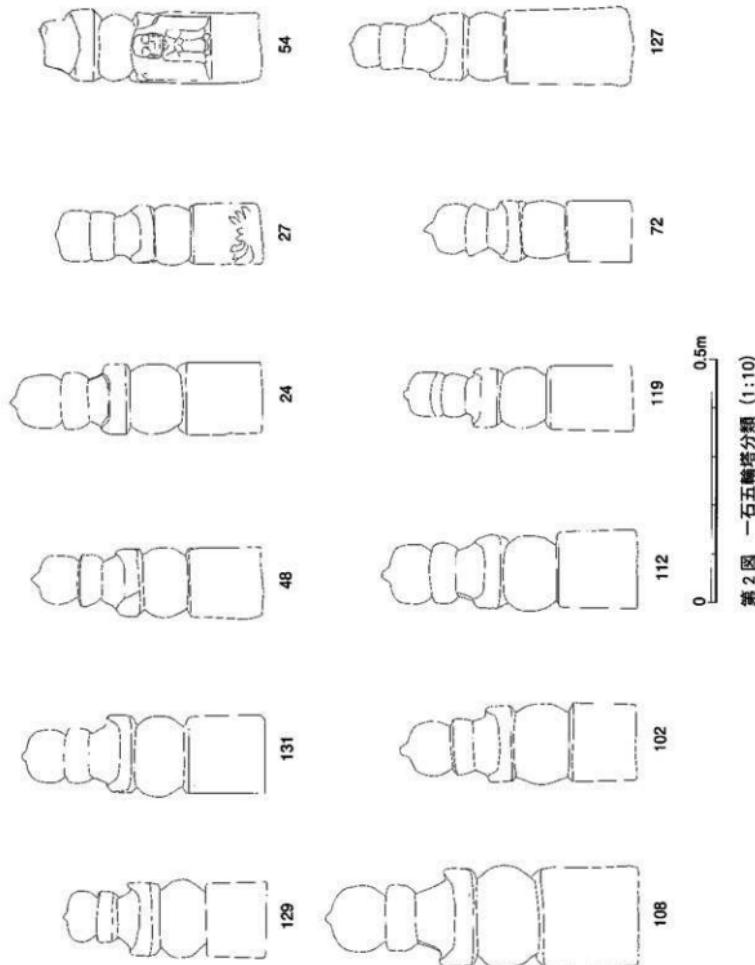
3類 空輪が筒状となり、風輪部の高さが増す。地輪の高さは幅に比べより高さが増し、全体に幅と比べ高さが強調されている。



写真1 三崎香仏寺4類の一石五輪塔

第1図 同左
(参考文献1
より引用)

4類 27・72・73・91など、高さ40cmと小型の一類である。底面の形状及び文様の位置から安置式とみられる。地輪の一面に蓮華文を彫り、表とする。後述する基壇を省略した形態と考えられる。のみ痕が明瞭に残る。空風輪の境はわずかに浅い溝を彫り、全体に円筒形をなす27・73・91と逆台形状の72がある。



5類 地輪が全高の半分以上を占める、いわゆる長足五輪塔である。一石以外に空風輪が別造りの20がある。火輪の高さが幅を超えると水輪は横長の偏円形となる。各部位を分ける彫り込みは浅く、表面にのみの痕跡が残る粗製の一類である。

5類は紀年名のある資料が三崎香仏寺に数基が知られる(第2図・写真1)。は慶安五年銘(写真1)は、空風輪の境は断面U字形の溝を呈し、火輪の軒は高く上方に突出する。泉慶院の例に比べて型式的に後出すると考えられる。

1類から3類への流れは時間的変化とみなすことができる。4類は3類～5類の間もしくはどちらかと並行する時期と位置づけておきたい。

そのほかに目を転じると、花崗岩製五輪塔・一石五輪塔、砂岩製五輪塔がある。花崗岩製の一石五輪等は、後述する基壇の1類に花崗岩製のものが見られることから、砂岩製一石五輪塔と同様の形態変化をとると考えられる。

花崗岩製、砂岩製とも五輪塔は15世紀代の範疇にあり、それより先行するものは見られなかった。ところで砂岩製五輪等の変化の中で、地域的特色の1つとして屋根の勾配が直線的で高くなる傾向がある。泉慶院127など、一石五輪塔5類との同時期の可能性も考えられる。今後の検討課題といふ。

いずれにせよ、泉慶院墓地の造墓活動は、15世紀後半から17世紀前半にかけての幅の中に押さえることができよう。



写真2 加久見香仏寺の花崗岩一石五輪塔

2 基壇

一石五輪塔の中には、反花座をも一石で造った「反花式」や「安置式」においても反花座上に立っているものがあることは知られている。調査地の周辺においても、泉慶院地区より南側の尾根筋状に所在する五輪塔群で確認されており(写真3)、泉慶院地区で確認した6基の基壇についても一石五輪塔の基壇の可能性を示すものである(写真4)。



写真3 宝山北丘陵の一石五輪塔



写真4 一石五輪塔・基壇復元

形態と文様から、次の3類に分けられる。

I類 複弁蓮華文を彫る文様帯は下部側面に比べ高く1／2以上を占める、両者の境界は沈線で区画する。

(71・83・97・122) 頂部平端面は14～16.5 cmである。(写真5)

II類 花弁の彫りこみが深くなり、左右が独立する。文様帯と側面の高さはほぼ同じで、両者を沈線で区画する。頂部平端面は18 cmである。(写真6：92)

III類 花弁は本来の形が消失し、球状に近い単弁となる。側面の高さが文様帯の高さを凌駕し、両者の境界の沈線はなくなるほか、表面の仕上げも荒い。頂部平端面は15 cmを測る。(写真7：78・107)



I類

II類

III類

写真5 基壇分類

基壇は、I～III類へと型式的な変化がたどれ、一石五輪塔の1～3類に対応する可能性がある。

なお、唯一元位置を保つ可能性のあるI類基壇の71(写真8)は、トレーニング4の上部平端面地山直上で検出されたが、下部に墓坑などは確認できなかった。

このことから泉院墓地においては、一石五輪塔は墓標ではなく供養塔として用いられたのかもしれない。



写真6 基壇71出土状況

3 石仏

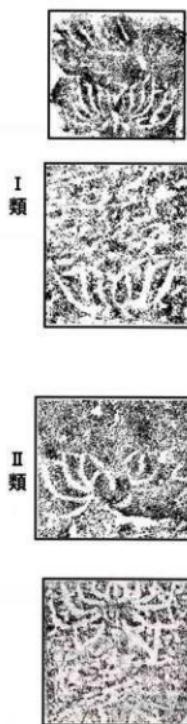
薄肉彫りや線刻の石仏はみられず、すべて半肉彫りで、1体を除きすべて地蔵尊の立像であるが、像が1体の例と2体の例がある。基部下端の形状から、底面を平坦に加工し、自立することが可能な安置式と、基部が河原石の自然面に近いもの、荒タキの状態のもの、先が尖り気味で地中に埋め込んだと見られる埋め込み式がある。石材は凝灰岩1点を除きすべて砂岩製である。これらは数の多少の差はあれ加久見香仏寺・三崎香仏寺など土佐清水市内の各所で見受けられるものであり、それらも参考にするといいくつかの形態に分けることが可能である。



A類 薄く板状に加工した石材の表面から内側に地蔵尊立像を彫り込む。1体(A I類)と2体(A II類)の表現があるが、すべての個体の基部に蓮華文を陰刻している。後背の形状から、舟形の1類(132)、尖頭形の2類(47)、直線的な側面で頂部が三角形をなす3類(116)がある。A II類には頂部が円筒形の1類(114)と三角形の2類(28)がある。このほかに上部を欠損するが21・124がA I類にあたる。

写真7 三崎香仏寺の石仏

一石五輪塔



石仏



第3図 石塔類蓮華文様の変遷



の天文十三（1544）年銘の石仏（第2図）は、泉慶院地区A類と同系統の工人集団の作であろうか、石仏背後の形態は132に近く、蓮華文様はI B類の47に近似する。外側の花卉が下方にさがり、II類文様の根型となった可能性もある。このことから、A類石仏の初源は16世紀前葉に求められ、II b類文様については県下では野市町宝鏡寺跡宝鏡印塔例（第4図）に近似することから16世紀末ごろ、II c類については17世紀前半の墓塔に同様に文様がみられることから、17世紀前葉に位置づけたい。

B類石仏については、A類と同一モチーフであることから並行する時期の所産であろうか。C類はB類と同様埋め込み式で、尊像の退化したものととらえたい。いわゆる長足五輪塔57の地輪にはC類石仏を刻んでおり、両者の同時代性を示す資料となった。17世紀前葉にその年代の一端があることをうかがい知ることができる。

泉慶院墓地調査開始時における表面清掃後の石材散布状況は、石仏と五輪塔が混在した状況にあった。これは通常見かける五輪塔と石仏に分けた墓地の片づけ状況とは異なり注目される。周辺から1か所に固められたにしても本来の位置での組み合わせが反映されているのではなかろうか。五輪塔と石仏の墓標と供養塔といった機能追及の手掛かりとはならないだろうか。

五輪塔・石仏とも銘文を刻むものはなかったが、時期的に15世紀後半から17世紀前半にかけての変遷をたどれる良好な資料といえる。

参考文献

- 1 林 勇作『土佐の石造遺品集平安－江戸時代』1995年
- 2 高知県立歴史民俗資料館「石の仏－土佐の石造美術1』 2004年
- 3 木下浩良「一石五輪塔と一石彫成五輪塔」『日引』第6号 2005年
- 4 多賀町教育委員会「破溝寺遺跡石仏谷墓跡」2005年
- 5 西山昌孝「大阪の一石五輪塔」『日引』第9号 2007年
- 6 松田朝由「高知県中世石造物の特徴と展開－土佐清水市内に所在する石造物を中心として－」『海運流通から見た土佐一条氏の学際的研究』2008年
- 7 市村高男「海運・流通から見た土佐・一条氏と加久見氏」『海運流通から見た土佐一条氏の学際的研究』2008年

図版 1

加久見全景



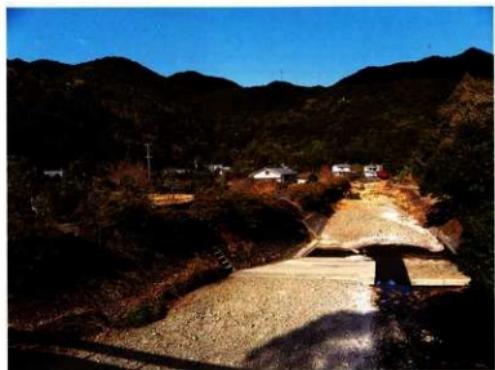
宮本地区近景



香仏寺地区近景



図版2



泉慶院地区遠景



蛙田地区近景



ヲロノ川地区遠景

TR 3 完掘状況（西より）



列石基礎遺構 1 検出状況（北より）



列石基礎遺構 1



図版4

宮本調査区

TR 3南壁とKTR1
(北東より)



列石基礎遺構1
北側遺物出土状況
(備前・天目)



列石基礎遺構1
遺物出土状況
(TR 3-W. 古瀬戸他。北東より)



瓦器碗(8)出土状況



KTR 1 下層遺構
(西より)



柱穴遺物出土状況



図版 6

宮本調査区



炉跡 1 断面



KTR 1 下層終了状況
(東より)



P 1 下層遺物出土状況

TR 5 (西より)



TR 5 土層断面 (北より)



TR 7 SD 2
(西より)



図版8

宮本調査区



TR 6 (北東より)



TR 5 P 3 梅瓶出土状況



調査終了状況 (西より)

トレンチ配置状況（西より）



トレンチ1



トレンチ2





調査前風景①



調査前風景②



トレンチ1



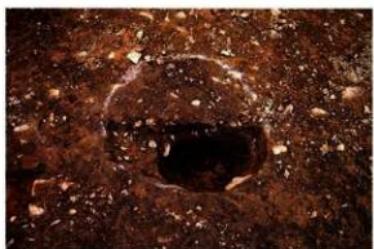
トレンチ1土坑検出状況



トレンチ1土坑



トレンチ2



トレンチ 2 柱穴



トレンチ 3



トレンチ 3・4



トレンチ 4 遺構検出状況



トレンチ 3 柱穴



青磁出土状況

図版12

蛙田調査区



トレンチ 2



トレンチ 4



調査区近景（トレンチ 3）



調査区近景（トレンチ 4）



トレンチ 4 土層断面



トレンチ 3



トレンチ3土坑断面



トレンチ3土坑



トレンチ3柱穴検出状況



トレンチ3柱穴遺物出土状況



トレンチ3柱穴断面



トレンチ3土層断面



調査前状況



作業風景



石造物検出状況①



石造物検出状況②



石造物検出状況③



石造物検出状況④



トレンチ1



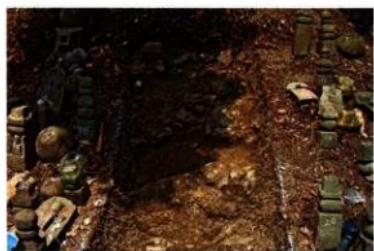
トレンチ2



トレンチ7



トレンチ3土層断面



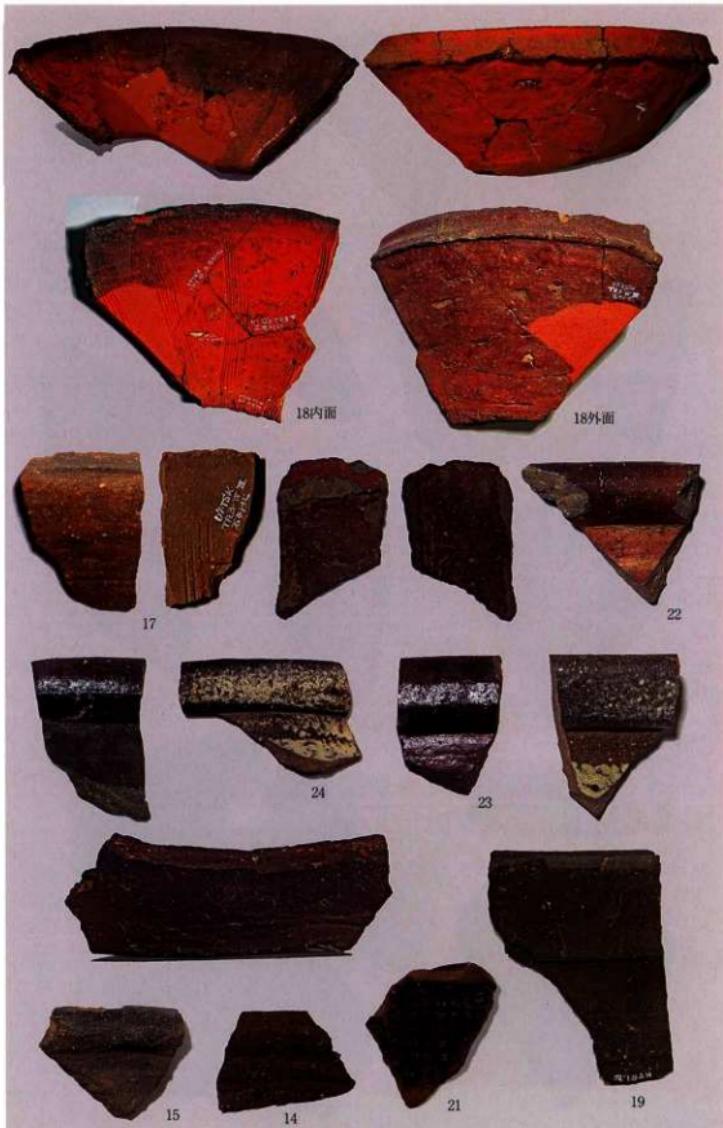
トレンチ6



トレンチ3



陶磁器（青磁・白磁・唐津）



備前焼・東播系・龜山系・常滑焼



瀬戸・美濃産陶器、天目碗



瓦器・瓦質土器



瓦質土器・土師質土器・銅錢



出土遺物





五輪塔①



五輪塔②



100



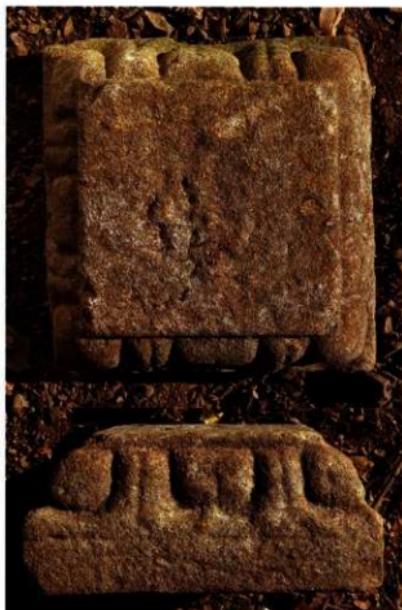
39



77



43



107



97



83



92

五輪塔③



60



35



17



111



49



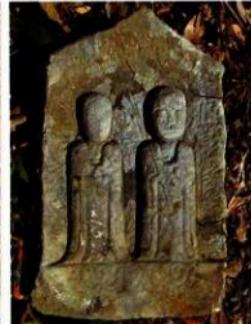
132



47



114



28

石仏①



79



57



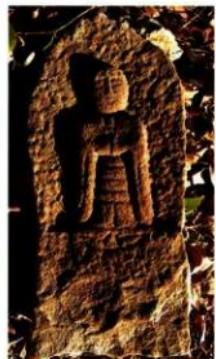
75



125



56



110



93

石仏②

報告書抄録

ふりがな	かぐみじょうかんいせきぐん しきつかくにんちょうさほうこくしょ							
書名	加久見城館遺跡群 - 試掘確認調査報告書 -							
副書名	上佐清水市埋蔵文化財調査報告 1							
編著者名	池澤俊幸・芝岡恵三・田村公利・弘田和司・松田直則							
編集機関	上佐清水市教育委員会							
所在地	〒787-0392 高知県土佐清水市天神町11番2号 Tel 0880-82-1116							
発行年月日	平成22年3月31日							
所収遺跡	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
加久見城館遺跡群	土佐清水市加久見字宮本、字柿木1149-1	39209	90090	32°54'22"	132°59'53"	平成19年 11月12日 ~12月12日	80m ²	学術調査
加久見城館遺跡群	土佐清水市加久見字ヲノ川1183、 字上城山1541-1、 字上柿田1467-1 ほか	39209	90090	32°54'22"	132°59'53"	平成20年 8月18日 ~9月16日	98m ²	学術調査
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
加久見城館遺跡群	居館、集落、墓地	中近世	獨立柱建物、柱穴、 石列、墓坑	土師質土器、東播系 須恵器、備前焼、湘 州瓦窓、吉磁、白磁、 天目、肥前陶磁、瓦器、 瓦質土器、宋錢、鉄 滓	加久見氏居館、家 臣団屋敷、墓地			

土佐清水市埋蔵文化財調査報告1

加久見城館遺跡群

- 試掘確認調査報告書 -

平成22年3月

発行 土佐清水市教育委員会

〒787-0392

高知県土佐清水市天神町11番2号

電話 0880-82-1116

印刷 西村謄写堂